Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

「“本を味わい日本を知る”作文コンクール 2016」
（「“品書知日本” 2016 征文大奖赛」）
入　賞　作　品

主 催　公益財団法人 日本科学協会
上海交通大学 図書館

目　次

★「“本を味わい日本を知る”作文コンクール 2016」入賞作品

北京大学　法学院　商法修士課程　2 年　汪　書璇……2
雲南大学　文化発展研究院　文化産業修士課程 3 年　龐　昆静……3
蘭州大学　胡　清元……5
蘭州大学　丛　麟懿……6
吉林大学　王緒鵬……8
武漢大学　周　璟……9
東北師範大学　宋　暁旭……11
南京大学　張　何斌……12
上海海事大学　羅　夢玲……14
瀋陽師範大学　趙　艺珺……16
天津外国語大学　任　俊彦……17
東北師範大学　馬　孟启……19
吉林大学　王　心如……20
華中師範大学　呉　中鵬……22
大連医科大学　裴　天序……24
上海交通大学　王　若平……25

※中国語原文の文章は、和訳して、日本語原文の文章は、原文のまま掲載しています。

★一等賞

「私」としての生活

北京大学　法学院　商法修士課程　2 年　汪　書璇

日本文学は、文学アマチュア愛好家である私が最も広く目を通す外国文学かもしれません。

夏目漱石、川端康成といった伝統文学から東野圭吾、村上春樹のような通俗文学まで、よく思い返してみると 100 冊以上あります。どうしてこれほど心を奪われるのか静かに考えてみると、おおよそ生活の 2 文字が理由のようです。

日本文学は「私」の生活に最も近い文学なのです。

主観的な独断による評価をお許しください。*お願いします*！まずは例を挙げてみます。

「私」は普通の人間で、混乱した残酷な戦火の経験がなく、氷と雪に覆われたキリマンジャロ山を制覇することもなく、思い出してもはらはらするような大恋愛もしません。「私」は都市で生活し、氏族社会の微妙で複雑な人間関係を味わっておらず、衣食の心配ない幼年期を送り、最大の苦悩は進学や仕事のストレス。「私」は 20 歳ぐらいで豊かな人生経験はなく、人生の起伏もありません。脇役たちは平々凡々な公務員、巨大なストレスの下でお金に困っているセールスマン、19 世紀の結婚したヨーロッパの貴族を恨む女性、20 世紀の第二次世界戦争の砲火の中で傷の痛みを癒やせない家庭……いずれも紙に書かれ、スクリーンで上映されると、感動やあこがれの部分もありますが、結局は、心から共鳴できるものではありません。少年、キャンパス、都市、慣習どおりの仕事や勉強、濃さも激しさもない感情は、他の地域の文学の中ではやや浅いかそう深くはない文学の題材となっています。

しかし、偶然ある小説と出会って私は感動しました。

とても簡単な物語です。日本の女性契約社員が主人公で、収入が少ないながらお金を貯めて世界を周遊しようと思い節約から手を付けるといった話ですが、彼女が世界周遊の願いを実現できたかどうかまでは最後まで描かれていません。

「家にも食事にも夜の灯りにも夏のエアコンにも冬の暖房にもお金がかかる。」本来とても小さな主題でも、うまく描かれていれば心を動かせるもので、「節約」という題材でも暖かさ、憂い、失望を描き、考えさせる物語にできるのです。

主人公は、さまざまな方法で節約を試みます。小説では、ポトスの実を食べてまで食事代を浮かそうと、その食べ方を昼間に考えては夜に夢見る姿が際立って描かれています。「彼女は、ポトスのいろいろな料理法を夢に見た。葉を千切りにしてサウザンアイランドドレッシングであえたサラダ、根をすりつぶした調味料、茎を具にしたスープなど。味はというとネギほど濃くはなく、ホウレンソウよりはなめらかで、キャベツより少し苦い。レタスほどみずみずしくはないが十分だった。ポトスを食べたナガセはとても満足し、にっこりとしてノートに 0 と書いた。」

ディテールの細かい描写は、平板でつまらない主人公の生活をわざと誇張してはいません。毎日の仕事がどれほど疲れようと、彼女が夢中でポトスの食べ方を真剣に研究して、出費が 0 になったことを喜ぶくだりを部外者が読むと、自由に考えてみるのではなく、広々とした都市の寂しく漂流する主人公の生活に自然と溶け込み、多くの記述は要りません。まさにこの本の題名、『ポトスライムの舟』[1]は、主人公のような平凡な人が都市の人込みの中で浮き沈みする隠喩です。私たちはみんな一隻の小舟であり、また小舟のように小さな夢と希望を持っていても、いつ実現するか分からず、細かく考えると苦しく無力感を覚えるものです。

物語の最後に主人公はポトスが有毒であることに気づき計画は瓦解しますが、淡く失望するものの怒りも恨みもせず、社会や時代対して訴えることもありません。この本は全体がどうにもならない生活と

[1] 津村記久子『ポトスライムの舟』、140 回芥川賞受賞作品

無力さに満ちていますが、悲しみも度を越すことはなく、ほど良いものです。

しかし、深さがないとは言えません。もし、最後に主題を昇華させ、冒頭で現代社会の喧噪の背後にある傷口について論じていたなら、かえって主人公の存在が道具として持ち出された「もの」にしか見えず、深く共鳴することはなかったと思います。こうして穏やかにことこまかく主人公の生活を描写しているからこそ、彼女の生活が身近に感じられ、どこかの地下鉄駅ですれ違うかもと思えるのです。私も実習のとき市街地のランチは高いと思って週に 1 日は果物やパンなどを持ち込んでいましたし、上司に仕事がなっていないと指摘されるとびくびくしてしまうのは、真面目に責任を取る態度のせいだけでなく、将来に自分を養えなくなるのが怖いからです。

日本文学が惜しみなく一般人にフォーカスを当て関心を寄せるのは、時代を誇張するために人物を書くのではなく、人物そのものがとても重要だからではと思います。読者を物語の世界に引き込んで体験、観察させると、思考の背後にある因果関係もおのずと伝わるのです。

「思い出してみると、彼女は 29 歳の誕生日の時も咳をしていた。31 歳の誕生日にも咳をしていることだろう。」何年もしたら彼女は体裁も気にせず蚊に刺された箇所をかきながら電話をするといった人間くさい瞬間を思い起こし、心の琴線に触れるかもしれません。

社会にとってはトマトスープの塩辛さなどまったく重要ではありませんが、個人にとっては枝葉末節が何日もの生活のトーンを決める可能性があります。日本料理のスタイルでは一口分の小鉢も精致この上なく盛りつけられているように、西洋画の色彩も、中国画の余白も、私はその細部のこだわりだけでなく、生活に対するぬくもりと情熱が好きです。人生はかえって平坦さの中で悟るものです。

あなたは大事だと日本文学は耳元でささやいてくれます。

両親の子供、友人の知己、会社の社員としてだけ重要なのではなく、自分自身として重要であり、外見が平凡でも家庭が幸福な人は重要で、学習に努めても心に曲折がある人も重要だと。

大多数の人は自暴自棄というほどでもなく張り切って生きているというほどでもない平凡な生き物でしょう。冷たいというほどでもなく熱いというほどでもない人付き合いをして、まばゆいというほどでもなく暗いというほどでもない未来を持っています。しかし、どのようであれ、まずは自分として生活し、独立した理想と気づきを持って、うっかり他人の足を踏んで赤面したり、親友に冷たくされて心を痛めたりするのです。まず自分を大事にしなければ他人を愛することが分かりません。日本人はつきあいが悪いという人がいますが、私は言葉の重みを感じ、かえって成熟した責任感と誠実さを感じます。

夏目漱石に「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」という言葉があります。

英雄のことは書きやすく、普通の人を描くのは難しいものです。

幸いカイドウの花が眠らず「私」につきあってくれています。（原文中国語）

『断捨離』への手紙

雲南大学　文化発展研究院　文化産業修士課程 3 年　龐　昆静

『断捨離』へ

こんにちは。

出会ったときはちょっと呆然としてしまいました。疑うまでもなく持っておくべき本といった感じで、ただその外観からは内容が想像できませんでした。あなたがやって来たのには下地が一応あります。そのころ講義で物体には生命があり、その生命の意味は人とのつながりにあると聞いていました。物を通してその背後にある人やことを見ることができ、博物館に並ぶ冷たい物体に人が足を止める理由もそこだと言います。そうして、日本文化のラベルが付いたあなたをお迎えしたわけです。

日本文化で最も印象深いのは、物を大切にするということです。最初の選択を慎重にして、物と出会ったときの初心を重視し、その縁を大事にして、最後もなおざりにしないこと。あなたにこれほど引きつ

けられるとは思ってもみませんでした。高野山の宿坊に泊まったとき修行僧が生活必需品をとても大事に使っていたのを見て、それらの用品はシンプルながら大変な意義を持つものだと感じたそうですね。もちろん物の背後と人との間にある意味だけでなく、割と実用的な立場から、物品の整理を通して自分の心、本当の自分と交流し、つきあい、自分を探していくことを教えてくれているのでしょう。あなたはこうした方法を断捨離と呼んでいますが、私は整理術と呼んでいます。私が最初、多くの人と同じように、整理なんて誰にでもできることではないと疑っていたことをご存じでしょうか。整理法が違えば効率の良さも違うというだけではと思っていました。わざわざ本を書いて教える必要のあるものだろうかと疑問だったのですが、よく読んでから、あなたの独特なところに気づいたのです。あなたの言う断捨離とは、主に「物と自分の関係」を中心として物を選ぶことであり、断というのは自宅に不必要なものを入れないという断絶のことですね。捨とは家中に散らかるがらくたを捨てること。離とは、物に対する執念を離れ、物の束縛から自分を解放することですね。そのプロセスを通じて、目に見える世界から見えない世界へと足を踏み入れ、最終的に自分を深く徹底的に理解して本当の自分を受け入れ、魂の安逸に達することを伝えたかったのではないでしょうか。

冒頭でその考えが分かり、確かに興味は湧きましたが、内心では不安でした。知識と感情のぎっしり詰まった本は最初こそいいものの、内容をよく検討せず鵜呑みにしてしまい、伝えようとしていることが曖昧なままでは時間の浪費になってしまうのではと心配だったのです。しかし思いもよらずあなたは誠実で、断、捨、離それぞれの目的と方法を一歩ずつ説明してくれました。実行可能な手順に細かく分けて、身体的行動を通じて心の歩みを進めるものです。時に心は動きたくないわけでもないのにぼうっとしてしまい、どう行動すべきか分からなくなります。時間の経過で心の負担が片付き、また動き出せるのかもしれません。

あなたは実にシンプルですが、シンプルな中にも深い内容を持っています。そう、整理はとるにたらないことでありながら、その背後にある豊かな内容を知ることもできるのです。私たちは消費社会と呼ばれる時代に暮らしており、体のみならず心も物に囲まれた私たちは物にとらわれ、時には抜け出せなくなることさえあります。生活空間が占拠され、心の空間も縛られてしまうのです。また私たちはより多くを求め続け、生活のために足し算を続けていることが問題だとは気づいているかもしれず、もうやらないぞと自戒することも多いのに、似たようなことを繰り返してしまいます。そうした衝動を効果的に抑えて現状を変える方法については多くの人が話題にしていますが、生活の細部に立ち入った議論は少なく、行動も複雑で、認識を繰り返す中で実際に研究と分析をしているのは、まるで生活のこまごまとした煩わしいことと結びつけては本の意義をなくしてしまうかのようです。時として知識は心を縛るのだと強く感じていました。そこをあなたはよくやってくれて、学習を続けることは知識の蓄積であり、学んだ知識で自分の生活をよりよく、心を寄り自由にするための方法を学ぶべきだと教えてくれました。

もちろん、心配なこともあります。断捨離がうまく運用されると物の需要が一定の範囲に抑えられることになりますが、そうすると工業の発展や国民経済の成長に影響しないでしょうか。私が心配なのは、今の経済、社会、文化の発展で数を追及する発展は最終的に衰退する運命にあり、置き場のない無数の心は何を捨て何をとるかです。あるデータによると、2013 年現在、全世界で 200 年を超える企業は日本に最も多く、3146 社あって、ドイツに 837 社、オランダに 222 社、フランスに 196 社あります。旅行シーズンになるたび、中国の観光客が日本で電気炊飯器や便器などを買いあさっているというニュースが次々と舞い込んできて、思わずその背後の意味を考え込んでしまいます。まずまずの答えとしては、日本がたゆまず伝承してきた「職人の精神」です。しっかりと、落ち着いて、絶えず改善して、すばらしさを追求するといった時代の気質が物を通じて感じられます。ひとつひとつの物の背後にあるのは日本人という民族の性格で、一生に一つのことをやり通す人となりです。寿司の神と尊称される小野二郎は簡単な食材を選んでごくシンプルな純粋さを求め、豊かな味わいを創りだし、その寿司店はミシュラン三つ星の栄誉に輝きました。たかが寿司でもその複雑さには想像を超えるものがあります。食材から工程まで、ご飯を炊くときの圧力、時間。酢飯を保温する具体的な温度、魚を締める時間の長さ、タコを握る強さ、にぎり寿司の方法のいずれにも具体的な要件があります。まさにこうしたディテールと秩序を極限まで追及したことで寿司が美味になると同時に技能や姿勢を載せたものとなります。そして技能や

姿勢がその生命の深さを絶えず押し広げて行くからこそ、時間の試練に耐えられ、末永くのれんを守り、情感を長続きさせられるのです。

この手紙を書いていて、あなたの置いてある本棚を見上げると、お互いの存在が前と少しは違っています。あなたのおかげで私の生命の厚みが増し、私があなたの存在を温めています。今のような落ち着きのない社会で自分を守れと絶えず私に注意し、小さな土地の上で、生活を土壌に、時間を栄養に、集中を力にして、私の命の中で美しく色とりどりの花を咲かせてください。（原文中国語）

★二等賞

詩のような響き―『ノルウェイの森』の感想―

蘭州大学　胡 清元

村上作品を初めてを読んだのはだいたい中 2 ごろです。当時は雨季のように長くじめじめした青春のただ中で、ひと眠りして起きると世の中のすべてが敵対しているようでした。周囲の人に逆らっては口論し、傷ついた小さいけもののようでした。それで自分から逃げるため本の世界に没頭していたのです。

初めて『ノルウェイの森』を手に取ったのは完全にビートルズの同名の歌のせいです。その夜はバケツを逆さにしたような大雨で、雨露がバルコニーのルーフにぱらぱら当たる音、西北の雨にいつも連れられてくる大風が窓の隙間から入ってくる音がしたので、私は布団の中で懐中電灯を片手に本を読み切りました。当時は小さすぎたので分からないところも多く、読み終えても全身が冷えた感覚しかなくて、寒さに震えました。この本を手に取るとその鼓動が感じ取れて、その血液がほんの少しずつ流れ氷のように冷たいオーラを放ち、ゆるやかな中に少しの絶望を持っているのが感じられました。風や雨の音がバックにあったせいかもしれません。当時の自分がそう感じたのが何故なのかは自分でも分かりませんが、ぐっすり寝てから見た夢では、ビルのそびえ立つ日本にいる自分が電話で直子の名前を呼んでいました。

後から思い起こして気づいたのですが、そもそも当時の私は密かに自分をワタナベに重ねており、緑子にとってのワタナベがワタナベにとっての直子のようで、世界に溶け込もうとしても藁一本つかめなかったのだと思っていました。だからこそ寒く、孤独でもの悲しいと感じ、この世界に自分がいる意味を認識できなかったのです。

反抗期が過ぎてからだいぶ長い間この本を読み直す勇気がありませんでした。自分の共鳴するものを見つけたその夜の染みいる寒さをずっと覚えていたからです。

『ノルウェイの森』を読み直したのは大学受験の後の夏休みです。頼まれごとを終えたかのように、改めてこの本に興味を引かれました。緑子とワタナベがビルの屋上で遠くの火事を眺めながらキスするシーンに思わず笑ってしまい、かわいい本だなと思いはじめました。

「私のことどれくらい好き？」

「世界中の森にいる虎が溶けてバターになるぐらい」

森の中のログハウス、山の斜面を行き来する 2 人に、私は『The Dharma Bums』の静かながら力に満ちたシーンを思い出しました。

私はボルヘスの（一番好きな）詩「時間の中にある偽りの扉、あなたの街はよりしなやかな昔に向いている。黎明の光、その送り出した朝が私達のほうへ、甘い褐色の海水を越えてくる。ブラインドを上げる前に、あなたの低い日の光はその花園で祝福を受けている。詩のように聞こえる都市には、庭の光が差す街がある」を本の扉に抜き書きしました。

この詩は彼が自信の故郷ブエノスアイレスを形容したものですが、私が想像する村上ワールドを形容するのにぴったりだと感じるのです。詩のように聞こえる都市で言うと緑子は「黎明の光」で、彼女の出現によって、直子に闇へ半分引き込まれていたワタナベが照らされ、結末で彼が緑子の名前を呼ぶのは、彼が絶望と闇の中の自分から脱却し、希望と光に満ちた世界へ向かうことを象徴しています。

厭世的な態度は一時の支えにしかなりません。村上がどれほどすさんだ偏屈な主人公を作っても、かわいくて優しいヒロインが薄闇に色を付けるのです。またこの本を閉じたとき、頭の中には緑子の名前が絶えず浮かんできて、お腹まで温まるように感じました。

3 回目に『ノルウェイの森』を読んだのは、思いつきようのない状況にいるときでした。大学 2 年のとき外祖父が亡くなり、訃報を知って数週間したある夜、彼を夢に見たのです。まだ小さい頃の記憶にある姿で外祖父がソファーに腰掛け、笑顔で「元元、よく会いに来てくれたね」と声をかけてきました。あまりに大きな悲痛に息をつけなくなって起き、その夜は夢から覚めて寄宿舎の真っ黒い天井を目にして、外祖父が本当に離れていってしまったのだと気づきました。ルームメイトの小刻みないびきの音で心が乱れたので、起き出した私はまた改めてこの本を開いたのです。

「死は決して生の反対側ではなく、生の一部分として永久に存在する。」

ぼんやりと外祖父が再び病の床に伏せたころを思い出すと、私は液体が一滴ずつ彼の血管に流れ込んでいくのを眺めていましたが、彼は背中が曲がり、虚弱な子供のようでした。ふとこの液体がちょっとずつ彼の命を吸収しているのではと感じた私は何かしようとして、輸液管を彼の体から抜こうと思いましたが、どうすることもできないと気づき絶望しました。

その夜に何か分かった気がします。生と死はそもそも相互依存しているもので、死は愛する人をそばから奪うのではなく、命の一部分として私たちとともに生活を続けていくことなのです。キズキが死んでワタナベと直子の体の一部となったから、ワタナベは直子に未練を残し、直子が死んでワタナベの体の一部となったから、ワタナベは生きることができ、直子を連れて彼らがこの上なく恐れまたあこがれる世界へ向かったのです。死亡は元来タブーとするべきことではなくて、世を去った身内はみな生き続け私たちに力をくれます。

また『ノルウェイの森』を開いたら、あの詩と同じように、しっかりと私の脳裏に焼き付いて、私の成長に伴って私の命の一部になってくれることをずっと期待しています。（原文中国語）

日本の陪臣についての小論

蘭州大学　丛 麟懿

思い出してみると、日本の歴史に触れ知るようになってもう 6 年です。思想と学問の両面に優れた南京の青年だった私はこの国を極端に憎んでおり、何も興味を持たなかったことがあります。高校 2 年のとき戦略ゲームにはまっていてたまたま有名な戦略ゲーム『信長の野望』に触れてからこの国の理解を始めたと言えるので、考えてみると少し申し訳ない気持ちです。

ついでに言うと、ある時点の歴史に対して大枠で理解するには、書籍を研究するよりも、歴史小説を読むほう効果的で、興味も湧きやすいのではとずっと思っています。もし初めに読んだ本が新田次郎の『武田信玄』ではなくベネディクト『菊と刀』だったら、詳しく読み始めたのが司馬遼太郎でなく津田左右吉だったら、途中でやめてしまった可能性が高いとさえ思います。つまり難解な内容、わかりにくい用語と観念より、激動の時代の英雄豪傑らが激しく衝突するほうがはるかに人を引きつけるということです。日本は優れた歴史の小説家の輩出される国で、昔はさておき近代だけでも、森鴎外から吉川英治、海音寺潮五郎、司馬遼太郎、池波正太郎、柴田錬三郎といった傑出した文豪の筆力で、もともと無味乾燥な歴史上の事件が一瞬で読者に深い感銘を与えて、感無量にさせる伝奇的な物語に変わることは、日本を知ろうとする我々にとって大きな幸いですよね。

本題に戻ると、先に述べたとおり、私が初めて読んだ日本に関する歴史小説は新田次郎先生の『武田信玄』です。理屈から言えば武田信玄らは戦国随一の大名、戦国随一の大悪人（柴田錬三郎『真田幸村』より）である人物には印象に残る事が無数にあるはずですが、私は主人公に興味を持ちにくいので、6 年後まだ印象に残っていることは多くの女性との愛情と、権力争いをする時の頭のよさと冷酷さだけで、川中島の合戦での上杉謙信との一騎打ちさえ感銘を覚えていません。長い時を隔ててなお印象

深いのは武田家の有名な陪臣で板垣信方、横田高松、武田信繁の 3 名です。彼らは武田信玄の人生のピークより前に戦死していますが、作者がこの陪臣たちのために残した記述は今なおあれこれと思い浮かびます。

板垣信方は信玄が若い頃ぶらぶらしているのを命がけで諫めています。特に信玄が挑発するように信方に「そなたの意見を聞かなかったらどうするか」と詰めよったとき、信方は平然と「殿にまったく期待できそうにないので切腹を選びます」と答えたくだりを読んだときは全身が震えました。横田高松は信玄が信濃を攻めたとき、虐殺政策を放棄するよう勧めましたが聞き入れられませんでした。抗議を示すため命を惜しまず戦場で戦死して信玄に自分の正しさを証明し、「人を殺し尽くせば信濃の皆が武田に反抗し続けるでしょう」と遺言を残しています。切腹の最初には自らの主君を向き邪念のない奉公の心を証明しました。横田高松のことはふと思い出してしまいます。武田信繁は自分にとって最も印象が深い人物です。信玄の弟である信繁は家臣としての道を貫き、兄の影のように黙々と背後で信玄を支えていました。武田家の運命がかかる 4 度目の川中島の合戦で、信繁は前衛が壊滅しそうになり援軍がまだ来ないとき、大将である兄を守るため、毅然として大旗を立て、上杉軍の注意を自分に引きつけました。敵軍に囲まれ、竹槍が襲ってきたとき信繁が天を仰いで「武田の勝ちだ！」と叫んだ姿に、私は言葉にできない感動を覚えました。滅私奉公、無私の犠牲は、さながら『葉隠聞書』で主張されている武士の精神の最もよい実例ですが、新田次郎先生は、武田軍が最終的に勝利して、上杉軍を追撃するとき敗走する兵が落とした戦利品──信繁の首級を奪回する場面で、武田家は信繁を失い、戦には勝ったが負けたように痛惜するというコントラストで「信繁の両眼はむなしく空を眺めている」と描写されていて、同書が川中島の合戦を描く上での画竜点睛だと思います。最近人気の大河ドラマ『真田丸』で、後の日本に名を轟かすことができなかったが司馬遼太郎に戦国最後のサムライの模範と賞賛された真田幸村の原名、真田信繁の由来に詳しい説明がなかったことが残念でなりません。

日中両国とも忠実さを重視しますが、やはり大きく異なりがあります。中国の臣下は得てして多くの身分を持っており、実際には数人に仕え、矛盾が生じてくることもよくあり、たとえば後漢の荀彧は劉備と曹操の間で、どちらが自分にとって忠誠を尽くす理由があるのか、両者に大きな衝突が生じたときおのずと決心が付かず、王者を支える才能の持ち主も鬱々として終わるほかありませんでした。こうしたことは日本の武家ではそう起こらず、陪臣は迷いなくどんな些細なことでも主君のために命を賭けましたが、その忠誠を得られるのは所属する藩のトップである領主のみで、日本の陪臣の忠誠はより狭く単純なもので、より力のあるものであることも多いと言うべきでしょう。どちらがよいとは評価できませんが、徳川の家臣が先にその場で命を落とす猛毒の食物を食べこみ暗殺する大阪方の忠臣の警戒心を解いた（司馬遼太郎『城塞』）というくだりを読んだときはかなり震撼しました。現代社会の考えでは愚挙かもしれませんが、それを理由に時代化された陪臣たちの高尚な人格を否定することはできません。もしそうでなければ、永遠に日本を理解できないことをさておいても、中国の諸葛亮さえ頑固に時代の流れに抵抗する凡人に過ぎないことになってしまいます。考えてみると、土方歳三が時機と情勢を読んで新政府に投降したことが笑いながら戦死する（司馬遼太郎『燃えよ剣』）よりよかったとは限らないでしょう。時代に逆らって動く無数の風雲児は日本人に人気ですが、この国が自らの原因により古来から身につけてきた審美観、価値観などとは切り離せないもので、忠実さはその中の重要な一部です。日本をよく理解していないと、こうした激しい行為はおのずと猟奇的なものとして印象に残ります。今の日本に対する中国の理解は恐らく野島剛先生が『誤解される日本人』（上海三聯書店、2016 年）で述べているのと同じようにまるで不足しており、特に社会レベルについての理解は歴史や価値観などの相違により大量の問題が存在するため、総じて道はまだまだ遠いのです。

本題に戻ると、字数が限られているため少しの本を読んで自分の日本に対する浅い考えを書くことしかできませんが、実際、火坂雅志『天地人』で直江兼続が見せた、主君の上杉景勝との君臣の美談には女流作家の茂呂美耶先生も心を奪われています。司馬遼太郎の『新選組血風録』、『坂本龍馬』に描かれた土方歳三、近藤勇、坂本龍馬、桂小五郎、勝海舟といった人々がそれぞれ忠誠を尽くす陣営のために心血を注いだ情熱の事績は、有名なパロディ漫画『銀魂』で見てさえ思わず尊敬の念に打たれます。隆慶一郎『花の慶次』のかぶき者、前田慶次は気ままで自由な姿は光栄（KOEI）の戦国時代もの

ゲーム各種に反映されており、山岡荘八『伊達政宗』で片倉小十郎が忠誠を尽くす姿は、正宗が失った右眼の化身なのではと思わされます。井上靖『風林火山』の山本勘助は武田信玄からの知遇に命をもって応え、早くから君臣二人が一体として描かれています。陪臣の群像にはそれぞれ特徴がありますが、誰もが自分のやりかたで家臣として、人としての道を守っています。ここですべてを詳述できないのは実に悔しいことです。

最後、中日両国の交流がさらに進めるよう心から祈り、また司馬遼太郎先生の没後 20 周年にあたり無限の追憶を捧げます。（原文中国語）

国民性と民主化—『菊と刀』の政治学からの解読—

吉林大学　王緒鵬

第二次世界戦争が終わろうという時、日本に対してより有効な占領と管理を実行するため、米国の文化人類学者ルース・ベネディクトが、日本の国民性に対して著しい成果がある研究を行って、『菊と刀』という本を著しました。ベネディクトの日本の国民性に対する研究は、先駆けであるのみならず洞察力に富んだものだと言えます。今でも『菊と刀』は、日本人を知るための「一冊目の本」と呼べるでしょう。戦後日本は敗戦国の衰退の中から急速に経済の飛躍する道へと上がりましたが、こうした「成功」の理由はさまざまで複雑なものです。しかし、日本の政治体制が権威的なものから民主的なものに転換したことにより、経済発展に強大な推進力、適切な制度保障を提供したことは認めるべきでしょう。これほど多くの国が体制転換に失敗している中、日本の成功はより貴重なものです。その原因を突き詰めると、ベネディクトが書いた日本の「国民性」からいくつか答えが見えるかもしれません。

特定の政治文化は特定の政治共同体の中で育まれるもので、共同体構成員の政治心理と政治思想を反映するだけでなく、構成員どころか共同体全体の行為にまで深遠な影響を生じます。長期的に歴史が変化する過程で、日本民族は自らに特有な社会文化を形成しました。こうした社会文化の一部が戦後に日本の民主化する過程で重要な効果を発揮しています。『菊と刀』では、日本民族の性格に等級の観念、実用主義、保守的な思想といった特徴のあることが簡単に分かります。これらの「国民性」はすべて日本の民主化と複雑で入り組んだつながりを持っています。

等級の観念と日本の民主化

ルース・ベネディクトは、『菊と刀』の中で、日本人の等級意識を「彼らの秩序、等級制に対する信頼は、自由平等に対する我々の信条と南北の両極のようだ」と述べています。”[2]こうした記述から、日本人が等級制に対して信頼感、または排斥しない態度を持っていたことが分かります。日本の社会人類学者、中根千枝は、日本社会はタテ型の等級制であるとしています。「この上下関係は我々が日本の社会集団の構成する典型的な情況から引き出した理論で、実際の生活の中ではまた集団の構成員間に凝集力を形成する指導の原則でもある」[3]というのはある意味、等級制は社会に垂直方向の動きが不足していることを表しており、このような社会は民主的な精神と明らかに矛盾します。しかし、日本の情況はやや特殊で、長い歴史の過程を経て、日本の等級制はすでに観念的存在になっており、観念の中核は「尊卑」であって「貴賤」ではなく、下層の上層に対する「秩序ある」妥協の精神となっていました。したがって、戦後日本の等級制は制度面でのみ打破されたものの、精神面では政治共同体の安定や調和に結びついていたため、日本の民主化改革は「妥協」と「需要」の形で進められたのです。

実用主義と日本の民主化

日本の政治文化には実用主義の傾向が存在します。このような実用主義は行為の「有効性」を求め、結果にその裏付けを期待することを指します。「彼らは盲従する訓練を受けられるが頑固で手なずけに

---

[2] ルース・ベネディクト『菊と刀』（呂万和、熊達雲、王智新訳）、2012 年、p40

[3] 中根千枝『日本社会』（許真、宋峻嶺訳）、天津人民出版社、1982 年、p25

くい。彼らは堅い保守的な思想を持っているが、新しい方法に引きつけられやすい。彼らがかつて中国の習わしを学び、続いて西方の学説を吸収したことが証明である。」[4]したがって、日本人が「目的」と「手段」の両方を満足させにくい状況に直面すると、「目的」を重んじて「手段」を軽んじる可能性が高くなります。頼肖爾は、この理由を日本人が普遍的な原則と特定の団体への適応とを明確に区分できるためだとしています。「総じて言えば、日本人は西洋人より抽象的な倫理道徳の原則で考えることが少なく、具体的な情況と複雑な人間関係によって考えることのほうが多い。」[5]第二次世界戦争の同盟軍が勝利したことで民主国家の力が示され、さらに米国が日本民主化改革を独占して行ったため、民主の観念は日本の人の心に深く入り込みました。強者を仰ぎ見て強者になることを渇望したことにより、民主主義の価値は日本で広範に普及したのです。またこの過程は好ましいもので、民主化改革の効果が出るほど社会の再建も成功し、日本人はより民主主義の力を信じるようになりました。そのため、民主化は絶えず前進して、安定した姿を続け、日本で実施できたのです。

保守主義と日本の民主化

保守主義は伝統を尊重して、急進的な政治革命や嵐のような政治改革に反対します。その重要な意味は共同体の核心価値を育成し、その価値に対する共同体構成員の忠誠心を高めることにあります。戦後日本社会は次のような保守化の過程を経験しています。米の占領軍が「公職追放令」を出して戦後日本の政治体系内部から政治の急進的分子を一掃したため、保守的な勢力が国会内での支配的地位を確立。民間の政治革新運動に対しては、与党が国民の注意を経済建設に向ける戦術をとって国民の政治運動に対する積極性を抑え、効果的に社会の不安定な要素を解消して、民主化の推進と強化に適した社会環境を作り出しました。より特筆すべきことは、民間の政治運動が低調だった 60 年代は、日本経済が正に急激に発展する段階だったことです。経済上の巨大な成功は客観的には日本の中産階級の増大と飛躍をもたらしました。中産階級が強まることは社会の安定を力強く支えるはずであり、また彼らは保守主義の忠実なファンでもあります。民主化の中堅の力としてこうした信頼できる中産階級ができ、日本の民主化は温和で漸進的な方法で行えたのです。

日本政治の民主化の過程は、伝統文化を継承するという基礎の上で革新を実現する過程でした。伝統文化の尊重は自国民の性格に対して選択的に行った保留です。このことは日本が民主化の過程の中で大きい文化の断裂を免れ、それによって国民意志のアンバランスによる精神レベルでの不安定を回避できたことを意味します。ルース・ベネディクトの記述を通じて、日本民族の国民性をわりと正確に把握できるだけでなく、これらの「正しく確実な見通し」を通じて日本の現代化過程における多くの現象を分析することもできます。『菊と刀』という本の貢献は知識面のみにとどまらず、方法上で問題の急所をついた世界を認識する考え方を開拓したことのほうが大きいと言えます。（原文中国語）

日本の味

武漢大学　周　璟

日本作家、塩野米松は『中国の美は蓮の実の芯のようなもので、かじらないと出て来ない。日本の生活の美学を鑑賞するのは外部からの力かもしれない」と述べています。日本人は生活方式上での美の追究が発達しており、社会のさまざまな風物に溶け込んでいます。ここから日本と中国の美学の共通点をうかがい知ることができます。東洋と西洋の文明に巻き込まれて融合するなか、伝統とモダンの間で、日本人は生活方式の細かい領域で独特な生活の趣と情感の傾向を形成し、自国ならではの生活の美学と生存の道を見つけ出しています。京都の美しくて鮮やかな色調、暖かい黄色のれんが、青銅色の古い看板も、朴訥を体現し自然な美しい形状を歪めた不規則な食器や茶器も、日本人が日常生活の中で物心一体の境地を追求しているからこそのものです。同様に一汁一菜、一色一膳も日本の美学をあふれるほど発展させています。国宝級の芸術家、北大路魯山人の『魯山人味道』では、少し焦げ

[4] ルース・ベネディクト『菊と刀』（呂万和、熊達雲、王智新訳）、2012 年、p259
[5] 頼肖爾『現代の日本人―伝統と変革』、商務印書館、1992 年、p120

るぐらい炙ったいい音のするてんぷらと言い、舌触りが良く翡翠色をした瓜皮の漬け物と言い、簡単な食材を通じて、美の追求を弁舌さわやかに語っています。魯山人は日本料理を根源まで戻しました。料理人の心は日本の美学の奥深さ、秘密、本質に回帰した匠の心です。

食の奥深さ

小さいもの、細かいものを美とするのは日本の伝統的な美意識です。清少納言は『枕草子』で、美しいものは瓜に描いた顔、雀の子がちゅんちゅん鳴く様子だと描いています。「何であれ小さいものは美しい。」中国の美学で大きさを強調するのと異なり、日本の美学では緻密精巧な精致で非常に細かいものを求めます。この点は魯山人の食の美学の中にも存分に現れています。たとえば鮑の宿借り作りでは「八十度ぐらいの熱で二十五分ぐらい蒸す……よりうどにきゅうりなどを二寸ぐらいに切り、それを千切りにして下へ敷く」とあり、料理の食材の産地、鮑の雄雌や大きさにも、調理方法、盛りつけ方にも厳格なこだわりがあり、細部に対して手間を惜しまないことを強調しています。見た目には簡単そうなお茶漬けでさえ、彼はシンプル、精致、典雅といった京都の食文化の精髄を見出し「それに充分な熱さの茶を徐々にえびの上からかける。すると、醤油は溶けてえびは白くなる。やがて、だしが溶けて、茶碗の中の茶は、よきスープとなって、この上なく美味いものとなる」と紹介しています。食材の微妙な変化を料理人が細かく記録しており、素朴な記述の中から美食への夢中さと追求が感じられます。

魯山人は食事のような普通のことを食物の吟味と捉え、最も美味な料理の精魂を食べているのです。かつて村上春樹は「小確幸」という語を創造しています。微小で確かな幸福を指しており、きめ細かい感情です。「夜には美味な食物を食べる、自分の人生ですべきことはこれだけだ」というのが魯山人の「小確幸」でしょう。

食の秘密

谷崎潤一郎は『陰翳礼讃』の中で、「だがその羊羹の色あいも、あれを塗り物の菓子器に入れて、肌の色が辛うじて見分けられる暗がりへ沈めると、ひとしお瞑想的になる。」と描いています。羊羹の上品で純潔な表層には黒くて深みのある漆器でなければつり合わず、日差しが闇に差し込む陰翳のような美を作り出さなければならないのです。食器が料理にもたらす神秘さがここから見られます。まさに魯山人の言う「これほど深い、これほどに知らねばならない味覚の世界のあることを銘記せよ」です。魯山人は食器を料理の衣装にたとえて、料理で尊重すべき美感は絵画、建築、自然の美とまったく同じであると考えていたため、彼は料理を作り始めてから、自ら窯を設け食器を作りました。彼の主導する陶器は形式に拘らず、あたかもその人のように独立独歩するものでした。欧米の現代的な簡単ではっきりした光と異なり、魯山人が作る陶器の陰翳の光は表に出ず含蓄のあるものです。縁がでこぼこした金彩色で木を描いた叶鉢も、質素で白い部分を残した染付口紅文字文大磁器壷も、陶土の触感に順応しており、作りが粗いところも細かいところもあって、色の深みにむらのある釉がかけられ、古風で典雅です。このため魯山人の器は多くが精致で高価な中国の磁器に似ておらず、秘密の美を帯びた陶器と漆器なのです。

秘密は幽玄みの礼賛です。かつて、ある客人が「料理の根本義はどこにあるか」と尋ねたとき、魯山人は「玄関」の 2 文字を書きました。一見さっぱり分かりませんが、よくよく考えると確かに奥深くとらえがたいところがあります。そもそもは人が美食に立ち入る表門であり、正々堂々と玄関から入って、自らの目鼻口で美食の真の味を実感するという料理の意義は、隠されていて言葉にできず、揺れて安定しない趣です。

食の本質

シンプルな美しさは自然そのものの美です。日本人がものの本質を好んで求め、自然を師としていることは、食材の鮮度への追及にずばりと現れています。魯山人の料理は最大限度に食材の特徴を発揮させるもので、「いずれも天地が想像した自然の力でそうなっているから」、たとえ月並みな白菜スープを作るにしても彼は心をこめて調味料を選び、白菜の色合いを醤油で汚すことは決してしないでしょう。お茶漬けは言うに及ばず、お茶の香りを残しながらまぐろ本来の美味しさも残し、さらにご飯の軟らかさも失ってはいけません。「まぐろの細かい油分がお茶に浮かんだら、大根おろしも混ぜ、最後に少しわさ

びを添えると、お茶漬け本来の香味が茶碗を満たす」というように食材本来の味に回帰しており、莫大な食欲をそそります。料理が食材そのものの味を有効活用するものだとすると、利用できる部分は全部利用してこそ料理であると言え、制作者が料理人と呼ばれる資格を持つのが、いわゆる料理の心です。

そのものの美しさはモダニズムに対抗する感情で、食もその人なりのものなので、魯山人本人の生活も「山鳥のように素直でありたい。太陽が上がって目覚め、日が沈んで眠る山鳥のように……」と追求していたのも道理です。自然と万物のが栄養の中から食材と符合する点を探し出すのも、本質を追う美学の伝統をです。

『魯山人味道』は北大路魯山人という偏執の天才が残した食物の散文で、美食の神と讃えられる彼は中国の飲食に対する認識が少し不公平かもしれませんが、その美食への探索と熱中は鑑賞できるものです。日本の味の最高点は料理人の心であり、料理も芸術です。料理人の温かな愛であり、匠の心なのです。（原文中国語）

★三等賞

消えゆく灯り―『源氏物語』に見るもののあはれの美学―

東北師範大学　宋 暁旭

「桜の花びらが舞い落ちる速度が秒速 5 センチメートルだとしたら、2 つの心が近づくのは何年？」日本のもののあはれの痛みを聞くともう忘れられなくなります。もののあはれはどんなに砕けた美しさでしょう、読み終わるのを忍びない気持ちにさせます。悲しみの深さ、悲嘆の切なさは、いつも秋の薄暗さや冬の寒さを伴います。

ほら、黎明の悲しさは夜終わった後の微かな光の純粋さで本質の闇と寒さをごまかせないでしょう。

物語は桜の花の下で始まり、桜の舞い散る中で終わります。それがもののあはれなのでしょう。悲しみがいつまでつきまとい、近づいて、離れ、痛惜して、しおれるのです。

本来そうあるべきではなく、本来これほどびくびくするほど痛み、痛いほど渇くべきではありません。

もののあはれは日本の悲劇的な独特の美学で、長い間東アジアの肥沃な土地に根を下ろし、人々の心に深く入り込んで作家の思想に浸透しているため、「文は山を見るように平らなことを喜ばず」、分かりやすく直接的な記述、順風満帆のハッピーエンドを捨てて、文学者たちが最も好む独創的風格を持つ叙述のスタイルは、自分の悲しみで作品にものさびしい美しさ、悲壮さで、いつまでも残る悲しみ、失意を与えるようになりだしました。「もののあはれ」とは何でしょう。本居宣長は『紫文要領』の中で「あはれで心が動く」と述べています。確かに、長い間広く知られているように、芸術の極致は死滅であり、無常の哀感と人知れぬ苦痛です。

ぼんやりとした黄昏時、ライトの下で紫式部の『源氏物語』を読み返すと、歌や踊り、ご馳走の数々から政略結婚、悲しみの極致まで、権勢の盛りから人の心の転化、栄華が尽きた後のとどまることないすすり泣きまでが目に入ってきます。一幕一幕の生死をたどるように、広く人々のさまざまな様子を見て、盛衰成敗、栄耀栄華がすべてまたたく間に消え去る一大ドラマです。『源氏物语』で作者の紫式部はもののあはれに対する解釈を最高峰にまで高めました。日本で「もののあはれの時代」を作り出し「あはれ」を基調とする小説は、作中で主人公の身分を用いて人物の対話の詩句、人物の運命に対する人知れぬ苦痛、秋の自然や景色と「哀愁」のトーンを合わせており、薫の君が愛人の通夜で詠んだ「雪が飛んで日を覆い一日やまない」といった歌などが世事の無常の痛みと寂しさを表しており、もののあはれに対する難解な解説が極致に達したと言えます。一字一句に心がえぐられます。

『源氏物語』の愛情。哀れな早死にに痛みが抑えられません。

哀愁を主旋律とする小説全体のなかにあって、源氏の君の愛情はとりわけ悲しい大筋です。見える部分から全貌を推察すると、源氏の君の多い恋人はその時代の女性の屈辱を代表しており、源氏の若君などの貴族の玩具のような存在に成り果てているだけではなく、政治の道具にもされています。源氏の君の父である桐壺の帝が出自の卑しい更衣をもてあそび、更衣は後者は入り乱れた奇怪な後宮

の争いの中で鬱々として死んでいます。源氏はその父に勝るとも劣らず、公然と悪びれもせず多くの女性の愛情を踏みつけにしています。夕顔は源氏の君の情愛の世界に登場したのが比較的早く、彼のせいで死んでしまった最初の女性でもあります。こうした悲劇のプロットは紫式部が小説中で何度も出しています。もののあはれは心が痛むよりも静かですが、こうした静かさは急に訪れて防げないもので、夕顔の望みがない愛情は真っ向から襲いかかり、心の引き裂かれる寂しさをより感じさせます。

『源氏物語』の「帚木」の巻は雨夜の品定めが 3 人の貴族の夜話、雨の夜の女性談義で始まります。

「もし幸いに出身が高貴な家庭であれば、たくさんの仕女に取り囲まれ、欠点の比較は現しにくく、男はその中でもおのずと多く得をする。中等の家柄では仕女が少なくなる。風格がそれぞれ異なり、かえって優劣が現れやすい。さらに下ではどうだろうか、自分が興味ないのでよく分からない。」身分の高さは聞けばすぐ分かります。このため貧しく身寄りのない夕顔の愛情の運命は初めから死刑に決まっていました。

初出時に彼女は狭い家の卑しい女性で、雨夜の品定めの基準では下等に属します。明らかに彼とは釣り合いません。「この白い花は名前を夕顔という。このような人名さながらの花は、いつもこのような不潔な軒下で咲く。その辺りの小屋を見ると、確かにぼろぼろで、粗末なものばかりで、見るに堪えない。この軒下にたくさん、わざわざ咲いているのだ」という文が証明しています。夕顔や夕顔、夕顔の花もこのようなすたれた土地で怯えながら咲いているのです。作者がはっきりと暗示しているのは、夕顔の花言葉、壊れやすくはかない美で、謙虚で従順なこの哀れな女性も同名の花のように黄昏時に咲いて翌朝にはしぼんでしまいます。しかし身分が入れ替わることはなく、彼は彼女を捨てたあとまた拾われる希望を持たせますが、幻にすぎませんでした。源氏の君が何度か訪れたのはすべて日暮の頃で、氷のように冷たいもやが低い軒先にかかり、氷のように冷たい寒い色調が、ほの暗い景色の中で弱々しく光っていました。夕顔はその後、源氏の君が前に関係した女性の呪いで死んでしまいます。彼女の愛情は結局は上品な場に登っていけず、まるで溺れる人が無駄にもがいてため息をつくかのようです。

笑って、泣いて、涙を涸らし、心を亡くしました。古代の和歌に「桜の花はいたずらに散り、君の帰りは分からない」というものがあります。日本の伝統の美学では残月、桜の散り尽くすさまに情けをかけることが好まれます。こうした無常の哀感がかえって言葉に尽くせない美を浮かび上がらせることに、もののあはれの真の意味があるのかもしれません。

俗世間の私たちはみんな、読んだ後に散り尽くす花と向き合って、涙目を擦りながらそっとつぶやくしかありません。

「先立たれてしまって、誰もいてくれない」（原文中国語）

『菊と刀』の中日関係についての啓示

南京大学　張 何斌

第二次世界戦争でドイツと日本の敗戦がすでに動かぬところとなった時、米国は両国に対する政策の制定に着手しました。最終方針を決めるため米国政府は各分野の専門家を動員して日本を研究させ、資料と意見を提供させましたが、その中に『菊と刀』の作者である人類学者ルース・ベネディクトがいました。彼女は「文化類型」理論に基づいて文化人類学の手法を運用して、戦時米国に拘禁されていた日本人の多くを調査し、大量に日本の文化製品を研究して彼女が推定した日本人に対応する方法は、米国政府の政策に取り込まれました。

菊の花は日本皇室の家紋、刀は日本人の武を尊ぶ文化（ある種類の意味の上で武士道）のシンボルで、これらにより日本人の矛盾した性格つまり日本文化の二重性（礼を尊びながら争いを好むなど）を象徴しています。この本にはさまざまな評価がありますが、この本の影響がとても大きいことは事実です。

日本人は歴史に対する態度には問題が存在し、自分の極めて悪い行為に向き合ってそれを認める勇気がなく、経済大国から政治大国になれるのかという懐疑が持たれ、ありうる軍事大国の地位に対して恐れを生じています。一衣帯水の隣国として、中国と日本は歴史上で頻繁に接触し、友好的な交流

も激しい対抗もしてきました。私たちはもともと兄弟のように仲が良くなければならない両国に摩擦が発生して（明らかな紛争を指します。各国の利益が一致しなければ必ず競争にはなるので）ひいては再度の戦争を招くことを見たくはありません。そのため私たちも自らを考え直し、その過程で日本をより深く理解する必要があります。

比べてみると、日本人はずっと中国文化を学ぶことに努め、夥しい時間を費やして全面的に中国を理解しようと試み、自国の伝統と結び付けて新しい文化を創造しています（事実上、日本人は文化を取り入れるにあたって決して簡単な「模倣主義」ではなく、彼らはこれまで西洋化させられていませんが、日本文化は確かに中華文明と異なる東方文化なのです。ハーバード大学のサミュエル・ハンティントン教授は日本文化を中国文明の子孫と呼んでいます）。明治維新の時、日本が「伝統の日本文化の精髄を維持する方法をとったことは、多くの面で現代化に役立ち、また日本が1930～40年代にこの文化の要素に助けを求め、改めて解釈し依存したことで帝国主義の行為に対する支持と弁護を喚起した可能性もある。」6確かに、日本文化の中には外来の成分が多くあるりますが、決して一段劣っていることを説明するものではなく、尊大になり馬鹿にすることは決してできません。

日本人は中国からも多くのものを学んでおり、中国ですでに忘れられた優良な伝統が日本には多く残っています。また日本文化に独特なところも学ぶに値するものです。2011年に東日本で大地震が発生して、津波と放射能事故が誘発されましたが、日本人の振る舞いは世間の人を驚嘆させ、模範にもなりました。しかし同様にこの民族が79年前に南京でとても悲惨な大虐殺を起こしたのです。どうしてでしょうか。日本人はどうして明らかに異なる両面を見せるのでしょうか。中華民族も優秀な民族で、日本人と付き合う時は主体的に彼らを理解したはずで、言わば「己を知り相手を知る」関係です。さらに同じ東アジアの大国で、東アジアおよびアジア、さらには全世界の経済発展、平和と安定、共同の繁栄が、すべて両国の長所を生かした助け合いと真心からの協力にかかっているということはなおさらです。

より良くこの目的を実現するため、日本人に対してより深く理解するべきなのです。中華民国元老、戴季陶がよい説明を残しています。「相手の過去がどのようか知らなければ、その現状がどこから来ているのか分からない。相手の今の真相を知らなければ、その将来の傾向がどのようなものか推測できない……どう反対するのか攻撃するのかを問わず、要するに理解しなければならない……単に学問そのものについて言うと、さまざまな面から専門的に研究する価値と必要があり、決して気にかけず放置してはならない。」[7]私たちも日本人が変わることを期待しています。結局のところ関係の発展には双方の努力が必要なのです。ベネディクトは「一つ一つの見えないコイルで縛られた菊の花を解放するには日本人が自ら刀のさびを落とすべきだ」と強調しています。[8]日本人にも自身の問題を知って欲しいということです。

今や国際情勢が錯綜して複雑で、経済危機は依然として解消できておらず、日本を含む主な資本主義国はいずれも回復の実現に努めています。ここ数年、中日両国には靖国神社、南京大虐殺、釣魚島（魚釣島）などの問題の上で摩擦があります。両国の指導者は日本の小泉純一郎首相が失脚した後から頻繁に接触し、「氷を割る旅」、「氷を融かす旅」、「暖かい春の旅」といった友好的な活動を展開していますが、しかし歴史の重なる恨みと現実の相違により両国には依然としてわだかまりが残っています。多くの人は現実を分析してから中日関係を展望しています。「普通は中国は日本に対してより強硬で、日本に第二次世界大戦中に犯した罪を認めるよう過去よりもいっそう強烈に求めている。」[9]日本は

---

6 サミュエル・ハンティントン『文明の衝突と世界秩序の再建』、周琪ほか訳、北京、新華出版社、2010年1月、第1版、p85から抜粋

7 戴季陶『菊と刀大全集　日本論》、北京、中国華僑出版社、2011年1月、第1版、p173から抜粋

8 劉暁峰『「菊と刀」を私はこう読む』から抜粋

9 バーンスタイン、モンロー『間もなく到来する米中の衝突』、隋麗君ほか訳、北京、新華出版社、1997年5月、第1版、p143から

中国の復興を恐れて米軍の助けを借りて自国を保護してますが、それでは中国のさらに強硬な態度を招くだけです。中国人民が必要としているのは心からの陳謝だけです。

実際には、中国と比べ、日本は米国に対してさらに大きい警戒心を持っています。日本は絶えず軍備を拡充していますが、ただ自衛を実現し、国の戦争抑止力を示そうと望んでいるだけだと私は思っています。ドイツ国民と同様に、戦争の傷、敗戦後の困惑と思索を経験した日本国民はもういかなる戦争を支持することもないでしょう。まして日本の現在の経済状態で軍事費の割合を高めることは不適切です。日本の経済体制のたくさんの弊害はすでに露見してきており、中国の資源、市場、労働力などの助けが必要です。日本はすでに進退きわまっており、実は中国の支持をもっと必要としています。

いずれにしても、中日両国は避けようのない隣人で、当然愛し合うべきで、誰もが両国が努力して対立を解消し共に前進できることを望んでいます。具体的な行動は個人が予測することはできません。その志が口先だけでないことを望むのみです。梅の花は中国人の気骨を象徴する花の一つで、梅と桜が常に春の同じころ咲くと、咲きそろえば世界がより美しくなります。ここで魯迅先生の詩を引用して、心から両国のため祈ります。「災難を経た兄弟も、めぐり会って笑えば恩讐はなくなる」[10]（原文中国語）

雑談：日本の茶道の中にある美―平常心―
岡倉天心『茶の本』を読んで

上海海事大学　羅　夢玲

茶は南方の嘉木なり、と言われます。お茶は普通の木として生まれましたが、陸羽と縁づいたそのときから普通の木を超える存在となり、精神の縮図「茶の香りは穏やかに奥義を極められ、茶人は情が薄いが志を明らかにできる」となりました。はっきりしませんが、遣唐使が日本へ持ち帰ったため、お茶と日本との運命もつながったのだそうです。日本人はゆっくりと中国のお茶を飲む習わしを受け入れ、お茶は茶祖と呼ばれる村田珠光が広め、武野紹鴎が発展させ、千利休が大衆に普及させたという 3 世代の伝承を経て、少しずつ日本の民衆の日常生活に溶け込み、次第に日本の独特な茶道が誕生して、代わるもののない精神文化、禅茶の美学となりました。

伝統の中華文化の中で、茶道は茶事を通じて雑念を払い欲情をなくして穏やかに奥義を極める気持ちを作り出すことであり、「茶道の深遠な境地に達したければ、静まる以外によい方法はない」と言えます。中国の伝統の文化における茶道の説明と異なり、岡倉天心は茶道は俗世のこまごました事の中に隠れた美への崇拝で……本質は不完全に対する崇拝であり、人生の宿命に多く存在する不可能の中で可能を試みる純真なもくろみである」と書いています。つまり、たとえ人は生命の中に存在する不完全な美を知っても、心には謙虚さと畏敬の念をとどめ、なんらかの可能な完成のため、絶えず優しい探索を続けよということです。探求の過程で茶道は耽美への信仰とロマンチックな気持ちに昇華します。茶道は日常生活の中の美に対して生じる崇拝に基づいて形成された儀式なのです。天心の『茶の本』という本は、千利休が崇める「わびさび」の精神の美学と禅の境地をずばりと表現している味わい深い本です。

茶事は人の営みのように入り組んだ複雑な義理人情であり、最も純粋で質素な心が必要な、済みきった無垢な内心の世界は、まさに日本の茶道の中に埋め込まれた純粋の意味のようです。『茶の本』の中で、岡倉天心は人間性とお茶をテーマに、日本の茶道が含む古典の哲学と美学を詳しく解釈しています。茶道は隠れた美の芸術であり、達観した信仰の理念です。日本人はまじめな民族で、彼らは他国の文化を学んで全面的に理解し、伝承して自国の精神文明に発展させ、勇敢に命を捧げる死の芸術、武士道精神を形成しただけでなく、純粋で調和がとれている生活の芸術、茶道も育みました。戦

抜粋

10 魯迅『題三義塔』から抜粋

国時代の昔から、茶道は武士と密接な関係にあります。当時、武士の身辺は濃厚な死の気配に覆われており、強大な精神的圧力に強いられた彼らは有効な精神の慰めを探し、緊張の中で精神の緩みを獲得したのです。お茶はお酒と比べ、落ち着いていて清浄で、神経を鎮める特徴を持っており、武士が内心の焦りを排除するという精神の需要にちょうどでした。そこで、武士にとっては、日常と戦場とを問わず、茶道が欠かせないものになったのです。その過程で、武士はお茶を沸かし、お茶を飲むと、静かな環境の中で浮ついた気持ちを捨て、ひっそりと静まり返った平常心を得て、雑念も欲も忘れられました。

こうした純粋で素朴な思想は日本の装い、生活の習わし、生活用具、飲食、儀礼などにも浸透しています。たとえば日本人はよく、珍しくもない事を「日常茶飯事」と言いますが、事を処理するにあたって平常心を要することを指しており、お茶を飲むように単純だという意味です。そのほか、各種の住まいの間取りや建築構造にも茶道の質素で純粋な美が隠されています。日本の建物と装飾物の基本は簡単、質素で、茶室も平々凡々としているようで、いかなる建物とも異なっており、深遠な芸術的構想を持っています。至る所の細部に技術が独自の境地に至った優雅で静寂な美しさが見られ、素朴で純粋で、そこにいると浮き世の喧噪、身心の疲れを忘れることができます。清新で広々とした野原に身を置いたように、非日常感が自然と生じ、そうした静寂さは他の場所で感じることができないものです。あの茶室の中の道具はすべて茶人が心をこめて選んだもので、部屋全体の配置にも心がこもっており、簡単でありながら単調ではなく、質素な環境の雰囲気を作り、茶人のさびの境地の追及と高尚な禅宗の教養を表すことを目指しています。茶人は茶具、茶室が絶対的に清潔であることを求めますが、それは茶人の茶道の芸術に対する追求から来るものです。後に、彼らは茶室で習った落ち着きと平常心を日常生活まで貫き、「物では喜ばず、自分のことで悲しまない」闊達さを保つようになりますが、ちょうど岡倉天心が「茶道の大家は自らが芸術家ではなく芸術になるよう努める」と書いているとおりです。私からすると、お茶と道を生活に溶け込ませ、平常心を維持することは美の最高の境地を求めることであり、老子の思想「大音は聲希なり、大象は形無し」と切り口は異なるものの同じ効果を持っています。最も美しい音は音がないように聞こえ、最も美しいイメージは跡が見えず、最も真実な日本の茶道は「もともと一物もなく、どこもほこりに染まらない」簡単な純粋さで、心の清さ、落ち着きと、他人、自然に対する尊敬を保つものです。

今の社会は情報化が急速に発展して、競争が激しく、物欲が飛び交い、人々の選択肢は枚挙にいとまがなく百花繚乱で、平常心を維持して身を処し事に当たることがとりわけ重要なことに見えるます。千利休は「お茶が普及したとき、当初の心は忘れられた」と語っています。趙文明の『感悟平常心』にも、「自己の真性を維持して、貪欲さと争いに陥らない」とあります。人は現実を離れて存在することはできず、本来の姿をなくして存在することもできません。人は自然と調和して共存して、人と人の間は互いに尊敬し尊重して、のんびり無欲な心で過ごすべきです。諺に「人はどんな事でも満足さえすれば毎日が楽しく、人は何も求めるものがないとき徳が自然と上がる」というものがあります。処世は「為るがままに、争わず、欲張らず、満足する」ものですが、ここで言う為るがままというのは何もしないということではなく、なすところがなく凡庸というわけでもありませんが、凶悪な勢力と闘うこととも違い、君子はさっぱりと平然としているということです。「中国で生まれたお茶は日本の茶道へと発展し、独特な美しい文化の風景になった」理由を考えたことのある人はいるでしょうか。私は、日本民族が茶道の学を生活に溶け込ませ、庭の花が咲いて散るのをのんびり眺める純粋な心を持っているからだと思います。

茶道は生活から出たもので、常に 1 杯の緑茶があり、人々の欲や虚栄心をなだめ、潤いが本当に美しい魂を放ち人々を浄化することを望む思想により、人々は浮き世の喧噪から遠ざかり、心の浄土を尋ね当てて、素朴な精神に戻れるのです。（原文中国語）

生きていく—日本の新感覚派文学の大家、川端康成を簡単に評して—

瀋陽師範大学　趙 艺珺

一輪の花が美しいならば、生きてゐようと、私はつぶやく時もある。 出典は日本の新感覚派文学の大家、川端康成の『花は眠らない』です。川端康成先生が書くカイドウの花は午前 4 時でも依然として開いており、自然の美の極致で、川端先生に無限で悲しくはかないものをもたらしています。『花は眠らない』でミケランジェロなどの大家に言及し「やうやくものが思ふやうに現はせる時が来ると、死だ」と書いているように。美は本質上は永久不変ですが現実には短く、もつれてほどけない水藻のようです。心の奥深くに「もののあはれ」が根付いている川端先生は「美」に対する夢中さと熱狂ぶりを持っていて、その美しさが消えてなくならないように、常に咲き続けしぼまないようにと望んでいました。だから、川端先生は一輪の花の美しさを見て、生きていくのだと自分に警告しているのです。川端先生はいつも生きていく必要性があるのか考えていて、その時の答えが、その花のために価値があるというものだったのではと私は理解しています。

川端康成はかつて「私は孤児で、帰るべき家がなく、悲しみ漂流する考えは絶え間なくまとわりついている」と語っています。川端康成の経歴と個人的体験は終始「孤独」が貫いており、そのことが小説の面持ちに深く影響しています。川端康成の作品は、小説の本質が「独り言」の世界で、人生が文学と分けられないことを実証しています。彼の文学の世界は正にこのような寂しさを基礎としているので、読んでいると淡い悲しみの情緒と悲劇的な雰囲気がいつまでも続き、悲しみと悲劇がその文学の基調であることに気づきます。彼の悲しみは西洋の退廃的なそれと異なり、日本の佛教の憐憫の情に染まった、もののあはれの美しさです。もののあはれの美しさは紫式部の『源氏物語』まで遡ることができます。国宝級の作品である『源氏物語』はさまざまな女性の哀愁、上品さ、含蓄、落ち着き、悲しみを完璧に表しています。女性のイメージを夢幻のように描いているのです。川端先生自身も「平安時代のもののあはれが日本の美の源流である」と語っています。このため川端先生の初めての代表作『伊豆の踊子』で彼は他の新感覚派作家がひたすら西洋をまねた執筆技法を捨てて、日本の伝統物のもののあはれの美しさ、日本の伝統の芸術精神に回帰して、愛に似て非なる感情により生じる淡いもの寂しさを表現しました。川端先生は彼らの交際を描く時、明るい文章を使うことなく、抑えた筆致で少年と少女のつかず離れず、どっちつかずな関係を描き、全体をしなやかで美しい感傷的な色調で覆っています。結末の埠頭で見送る場面には、涙があふれる痛ましさも、声をからした力の限りの叫びもなく、この時の「悲しみ」はやさしい「悲しみ」、含蓄がある「悲しみ」、余韻の続く「悲しみ」で、大きな「悲しみ」です。川端先生は二人の別れの悲しみを美に従属させ、美に悲しみを制約させて、淡い悲しみと真実の美を融け合わせ、悲哀の美という抒情の世界を作り出し、そして二人のお互いの同情をそこにまとわりつかせています。このような美しさは深く繊細で、主人公の自分の立場に対する悲しみと恨みを織りなして、作家の同情、哀れみが溶け込んで、ぼんやりと感傷的な審美的状態を見せています。こうした状態は作家の内心にある作品中の人物、特に下層の女性への哀れみから出ており、最も純潔な感情の真実で自然な現れです。その後の『雪国』、『古都』の中にも川端先生のこうした感情の現れが見られます。

もののあはれの美しさに対する感情の現れには川端先生の万物に対する尊重も含まれます。『千羽鶴』の中で文子は志野の湯飲みを割るという行動により菊治に「でももっといいものがるでしょう。あなたがそれを使いながら別の最上の志野のことを思っていたら、私にはつらすぎます」と諭しています。文子の目的は菊治に過去と分かれ現在を見つめるよう教えることです。ごく簡単な話でもののあはれのすべてを愛おしむ「もっと良い物事を大切にするには、罪の責任に縛られ、尻込みしていてはならない」という哲理を表しています。こうしたこわれやすいものは美しく、唯一無二の美しさです。いやがうえにも大切にする必要があります。これが、悲しみの原因そのものが決して痛みだけではなく、解脱と希望のありかでもある理由です。川端先生の親友の三島由紀夫先生の『金閣寺』で主人公が金閣寺に火を放つ挙動は、文子が志野の湯飲みを割る表現と違う手法で同じ効果をあげています。

川端先生の最も有名な作品は『雪国』で、この作品によりノーベル文学賞を受賞しています。1968 年

のノーベル文学賞授賞時にスウェーデン学士院は「彼は忠実に日本の古典文学に立脚して、純粋な日本伝統の文学モデルを継承している。川端氏の叙事技巧には非常に繊細な趣の詩情がある」と評価しています。

物語の冒頭で窓ガラスに映し出された少女の容貌は「流れゆく夕暮れの景色に漂って」おり、神社の側の杉林は「暗緑の葉が大空を覆い隠し、周りは深くて静謐に見え」、冬の日の夜の景色は「星が競って光り輝き、幻のような速さでゆっくりと落ちてくるよう」で、月光の下の平原は「淡く微かな夕霧が山全体を深いサファイア色に映し、輪郭がはっきりと浮かんで」おり、山間の白い花をは「山上に流れ落ちる秋の陽のよう」で、物語の最後に出てくる銀河は「その赤裸裸な身体で夜の景色の果てしない大地を抱擁するかのよう」だと書いています。

極度に優美なタッチは川端先生の心の底の憐れみ、ひいては淡く微かな慈悲をも帯びています。目を上げて見ると、至る所が清く澄んでいて静かで、虚無で、真実でもあり幻でもある夢の世界がほんの少しずつ読者の目の前に現れます。川端先生の文学の基礎的な技能と内包がとてもよく表れています。以前、友人が冗談で「川端先生の作品、特に『雪国』は本当にわかりにくい」と言ったとき、私は「3回読んでやっと理解できたけれど、理解できただけ」だと答えました。本当に読解するには、民間の文化、宗教文化を含めた日本文化を深く悟るしかないでしょう。川端先生は日本の美と死に対してとても伝統的また独特な感銘を持っていて、こうした微かな感覚はすべて含蓄がある描写を通じて表現されています。そして含蓄が小説の全体を貫いています。

川端先生は寂しい人で、彼は生きていく理由、生命を引きとめる存在が何かをずっと探しています。

偶然いつも目が覚めると花が咲いているのはちょうど良いです。
雪の降るときにお酒を飲むのはちょうど良いです。
伊豆で愛する人のために一曲舞うのはちょうど良いです。
今を生き、生きていくのです。
それが人生の大きな幸せでしょう。（原文中国語）

拝謁する葉—日本のお茶と茶道の後味—

天津外国語大学　任 俊彦

茶は南方の嘉木なり、と言われます。昔から、気の置けない仲間と天気や月齢の雑談をしてまろやかな茶を軽く味わうと心にしみわたって心が清められた感じがするものです。実はこのお茶に対しては、私もちょっと試みてやめています。何日か前、偶然に森下典子の『日日是好日』を読んで知ったのですが、茶道というものがあり、お茶の浮き沈みが生命の真の意味で、日本民族の魂はみなこの深緑の中で水と火の鍛練を経験することが浸透していることを知りました。

一輪の花が世界を語る——お茶の縁と切り離せない中日の交流

数千年前、明庵栄西という禅僧が日本を発ち、草鞋履きに思い経典を背負って、菩提と涅槃の古い道を求めて中国に来ました。帰りを待っているとき、荷物にいつの間にか輪廻を忘れた葉が増えており、南宋の西風を追いかけて新しい落ち着き先の日本へ渡ったという話はすぐ思い出せるお茶の故事です。

お茶は中国が起源で、唐代に勃興して宋代で盛んになり、儒教や佛教とまじって中国の独特な茶芸文化を形成しています。仏教が中国で発展するにつれ、加えて当時の社会が比較的開放的だったため、中国と世界のつながりは日に日に密接になり、ますます多くの僧侶が中国を訪れるようになりました。来世を最高の境地とするための修行をするためではなく、志と信念が一致する縁を探すためだけの人々です。こうして栄西は中日の国交の使者になり、様々な困難を乗り越えて法を求めて、中国の仏法を日本に広めました。浮世でのめぐり会いに理由がいらないのか、前生にあの世で共に成長したのか、栄西はお茶に出会いました。桜の美しさには見劣りするかもしれませんが、香りでは勝っており、とにかく日本はお茶を受け入れ、大和民族の土壌に根付かせました。薄緑になるまでひき砕いて煮え湯で洗うと、いく筋かの温かい湯気に変わり、花の香りをまとって、大海原にも広がり、海を隔てた故郷が

入り乱れて輝いたとき、中日の文化がからまり始め、お茶の世界も形成されたのです。

一葉一菩提—茶と禅は一体、回帰する道—

仏教はお茶を尊んでいるため、「茶禅一味」（茶と禅は一体）と言われます。栄西のころから、日本のお茶は禅と切り離せない縁がありました。お茶は人生の浮き沈みを味わい、禅は涅槃の境界に目覚めます。お茶の清談に味わいがあることは、正に禅の求める質素な自然ではありませんか。

『茶経』には、苦みをすすって甘みを飲むのがお茶という言葉があります。お茶は苦くて体を冷やす性質がありますが、苦みの中に甘みがあり、苦みの後で甘みに戻るため、日本の仏教ではお茶を嗜むことが人生を味わうことに役立つと考えられており、参破苦諦とはいわゆる茶事、人生のことです。さらに、禅はしきたりを重んじており、人はまずいくつかのしきたりに従って修行を積んで自分の性格を修養鍛練しないと、欲求を抑制する必要がなく思いのままにしても決まった境界を越えないで済むようにはなれないとされています。このため日本の茶道はしきたりが複雑で、お茶を受け取る、挨拶をする、3 回茶碗を回す、軽く味わう、ゆっくり飲む、返上するといった数百回のお辞儀をする過程があり、実にきわめてくどいと言えます。しかしただこのような方法を通じて心を磨き、無造作にふるまっても礼儀作法にかなうようになって初めて、日本の茶の道を本当に感じ悟ったと言えるのです。だから日本人が世界に与える印象がずっときちんとしてまじめなのは茶道の影響を受けているのかもしれません。お茶は中国から日本に渡って「芸」から「道」になりましたが、めまぐるしく変化したとしても、お茶と禅はいずれも縮図であり、ある統治者が秩序をつなぎとめるため、ある地方の浄土の志を保護したものです。

日日是好日——一期一会、一刻千金

森下典子は「会いたいときは会い、花が咲けば祝うのは、人生唯一の掌握できることだからである。よって重要な人ならば食事を共にして共に生き、一緒になる」と言っていますが、これこそが茶道の「一期一会」の真の意味かもしれません。

年々のお茶は似ていても、年々人は変わっていきます。古代、呂蒙は士別れて三日ならば即ち更に刮目して相待つべしと嘆き、李清は物はもとのままだが人はすでになくなり、すべてが休止したと感傷を詠みましたが、日本の茶道もそのようなものです。たとえ一回の茶会がもっと冗長であっても、初めから最後まで、そのつど立てたお茶、そのたび漂う微かな香りのいずれも、その時その場所その人と同じにはできません。人生は無常、時間は宝石よりも貴く、それによって主客間の貴重な時間を大切にせよ、盛大な宴会は続かないと警告してくれるのです。実は「一期一会」の理念は日本の武士道でも取り上げられており、それによって武士道を学ぶ人が「もう一度やってみよう」という考えで油断しないよう警告しています。生死の瀬戸際であれば「もう一度」はないので、毎回の格闘を「一期一会」と捉えよというのです。茶道は禅の道でもあり、仏教は「無常」を説いているため、毎回の精神の洗礼を大切にして、真我の境地に達します。茶道はまた国の道でもあり、日本人はお茶によって交際しています。国家間の会談も同様にこの規則に従って、一回ごとの会談するのを重視し、ひとりひとりの「客」を尊重して礼儀の国の茶道の精神を尽くすことが日本政府の求めるところでしょう。だから「日日是好日」を胸に刻み、花鳥風月に出会うたび無駄に過ごすことなく、昔を知り今を語る機会のすべてを唯一で永久不変のものに変えてほしいのです。一期一会、一飲一思。

夜ごと春の夜——わびさび、精神の修養

「茶の香りは穏やかに奥義を極められ、茶人は情が薄いが志を明らかにできる。」日本で武士の地位が向上するにつれ貴族文人は次第に没落し、隠居を始めました。草庵を結ぶだけではなく、世事を問わず、心の中で豆を植え小屋を建てていました。そうして日本茶道の精髄、和敬とわびさびが生まれたのです。

いわゆる「和敬」とは来賓を尊重することで、「わびさび」は静かで物寂しい美学を表しています。一碗の水を汲んで一煎の茶を立て、一人の友と会って一つの話をすること。人は君子の会話は水のようだと言いますが、茶人つきあいはお茶のようで、茶人の付き合いは「和」の一文字を継承しており、人に接し事を処理するには人の和が最も大切であると同時に、同輩や年長者に対する「敬」も忘れません。「どうぞごゆっくり」、「どうぞお先に」といった言葉に一番よく表れていないでしょうか。貴族文人は世事に染まることを望まず、お茶に世間を見て、お茶にかこつけて春秋を送り、暇な時に茶道具の手入れを

して心の澱をさらおうとし、茶の「清」を悟って、奮起するときは細かく刻んだ新茶を淹れ、お茶の最高の境地「さび」を追い求めました。千利休は「水とお湯は茶中と茶筅を洗うことができるが、柄杓では心を洗うことができる」と述べています。中国茶芸の「正清和雅」と異なり、日本の茶道は上品な飾りというだけではなく、貴族が隠遁して隠居の精神を託すものでもあり、自身に対する洗礼の認識で、心の浄化に対する探求なのです。

1 枚の葉を水中に落とせば、水の味が変わりお茶になります。山の水が上、川の水が中、井戸水は下と言われ、異なるお茶になります。ある日本の僧侶がお茶を掌にささげ持って参道を歩くと、仏教の祖はそれを覚えていてお茶に魂を与え、日本の土地で育ませました。良い茶葉をひき砕いて、お湯を煮立て、山水を背景に、うっすらと香るお茶を緑にして、茶人はわびさびの中で禅の道と人生を悟り、仏教の祖はそれを「茶道」と呼ぶのだと教えました。千百年来お茶は参拝の足取りを止めることなくひたすら真の「道」を、最初の本心を、最初の「和」を求めてきました。中国茶芸の「正清和雅」、茶道の「わびさび」はいろいろ変わっても本質は変わらず、いずれも「和」を尊重しています。いわゆる「和」は実はそう奥深いものではありません。栄西という僧侶が何度も山を越え、危険を恐れず南宋と茶葉を訪ねたのは国境を越えた出会いなのですから。（原文中国語）

『古都』を味わう：京都と西安

東北師範大学　馬　孟启

一、発端

西安を離れてすでに 1 年余りになりますが、いつも気づかないうちあの都市の中の時間を思い出しています。私が生活していた、私の一生についていく、この移動する盛大な宴会は、パリではなく西安です。私は古い物、古い本が好きで、古い器もすべて好きなので、おのずと古都が好きです。西安での数年で、私は山水を遊覧し、古跡を見学して、いくつか本も読みました。「万巻の書を読んで、万里を行く」が私の理想です。

読書で名著を読むのは、貴重な人文的価値があるためです。私は文学を偏愛しています。文学は名著もたくさんありますが、すべての本が感動できるわけではありません。作品が読者の共鳴を引き起こして好まれるようになるのは、読者の経験と関係があるのかもしれません。川端康成の『古都』が気に入ったのは、その本を読んだときちょうど西安にいて、彼は京都が好きで、私も西安が好きという点で似ていたからかもしれません。

『古都』を味わって読んでいると、京都の入り組んでいる多彩な歴史文化に感嘆しながら、無意識のうちに京都と西安を比べてしまいます。さすがにこの両都市には深い背景があります。京都は日本人の心の故郷で、西安は中華文明の発祥の地です。京都の古称は平安京、西安古称は長安で、平安京は唐の長安に倣って造られたため、両都市の構造は非常に似ています。平安京にも長安にもある「安」の字は、両国民が都市を築いた当初の平安を切に願い、平和を待ち望むという願望を表現しています。両都市の人々は千年の歴史の長い流れの中で行き来しあって互いを評価してきました。近代の百年に中日両国が戦争をして、冷戦で敵対するとは予測しなかったことでしょう。しかし黒い雲は常に消えるもので、過去も結局は歴史となり、1972 年に中日両国が国交を回復し、1974 年に西安と京都は姉妹都市となりました。『古都』の中の千重子と苗子のように、姉妹は再会したのです。

二、春を悼む

春はいつも喜ばしいもので、草が育ち鶯が飛び、万物が成長して、一面に生気が満ちます。しかし繊細な人はこのような季節の中では悲しみ悼みやすく、言葉にならない悲しい情緒を抑えられなくなります。特に春の夕方は少し肌寒く、ちょうどよい具合にだんだん西へ沈む斜陽も見えます。千重子はそうした情況で、自分は捨て子であると真一に告げたのでした。満開の桜を楽しんでいても、うっすら春を悼む情緒があります。千重子と真一は平安神宮へ花見に行き、絢爛に花開く桜と見目良い少年少女はかなり美しい絵になっただろうと想像できます。しかし桜の花期は短く、すぐに散ってしまいます。青春も

同様にまた去りやすく、この道理を知った後ではいっそうこの目の前の美しい景色と美人が大事に思えます。

西安も同様に花見の名所で、楽遊原には日本でもよく知られる仏閣、青龍寺があります。古代、日本の高僧の空海がここで道を尋ね法を求め、帰国後に真言宗を創立して、京都の東寺を総本山にしました。青龍寺の桜は日本から来たもので、毎年 3 月の中～下旬に先を争って開花します。友人と花見に行ったときは桜の品種も分かりませんでしたが、白、赤、ピンクの桜の群れは本当に美しいものでしたです。遊び疲れて芝生に腰を下ろし、ものを食べておしゃべりをして、その時は楽しさにかまけていて遊んでいましたが、いい時間は長く続かず、時間を大切にするべきだという道理は頭にありませんでした。夕方になると、示し合わせたように「夕陽は無限がよいが黄昏が近い」という詩を唱和していました。それから私達は卒業し、彼女は上海に行って、私は長春に来て、以来連絡がなく、音信もありません。

三、盛大な光景

京都には、葵祭、祇園祭、時代祭の三大祭があり、いずれも盛大な規模で町中が盛り上がります。祭は個々人の感情を開放するだけでなく、身内や旧友が集まり懐かしむ口実でもあります。『古都』の中で千重子と苗子はにぎわう祇園祭のときに出会いますが、そのとき苗子は 7 度目の御旅所参りで、双子の姉妹が見つかるようにと祈っていました。一節一節の文字だけを通じて、京都の祭の盛大な眺めを還元することは多分できません。自ら経験した人でなければ川端の綴った京都の祭がどれほどにぎわうものだったか理解できないのだと思います。

西安の地方では祭日が少なく、京都のような盛大な集会もありませんが、しかし西安は美しい自然の景色と豊富な歴史文化の古跡のため、全国の旅行者を引きつけています。西安碑林の石碑には長安の八景が記載されています。華岳の仙掌、驪山の夕焼け、灞柳の吹雪、曲江の流飲、雁塔は朝を告げる鐘、咸陽の古渡、草堂の煙霧、太白の積雪です。ちょうど数年前のこの季節、9 月下旬、友達と華山に登りました。夜明け前に華山の山頂に上ったあのとき、感激の涙が目にあふれて、絶景と友情のために歓呼して抱擁しました。

四、祈願

京都と西安は神社仏閣の多さで世界的にも有名です。京都には金閣寺、清水寺、八坂神社，西安には大慈恩寺、法紋寺、重陽宮があり、これらの宗教の景勝地では歴史文化の財産が保存されており、また人々の敬虔な信仰、幸福を祈願する精神の落ち着き先でもあります。千重子の父、太吉郎は心を落ち着かせるためによく深い山にある尼庵を訪れていました。私も彼と同じ趣味を持っていますが、少し違います。小寨は西安で最もにぎやかな商業地区の一つで、平日が非常に騒がしいのですが、その賑わいの中に俗世を離れた聖地、大興善寺があります。密教の宗祖が布教したところです。よく立ち入っては瞑想したり、人生について、世界についてなど、いくつか問題を考えに行ったりしています。境内を散歩していると、金剛堂の前に日本式の記念碑があるのが分かります。具体的な内容はよく覚えていませんが、日本国が中日両国の友好的な交流を記念して立てたもので、日中両国が代々友好的であるようにとの両国民の共通の願いです。私もよく中日関係を考えるので、国際政治学の大学院に進み、専門的に中日関係を研究しようと決意しました。少し前にネットでストリーミング番組を見ていたとき、京都のある神社で中日友好！とハートの描かれた絵馬が映っていました。

中日の友好を推進する事業をする人はいるでしょうが、私も全力を尽くしたいと思います。（原文中国語）

『敗北を抱きしめて』に見る日本の国民性

吉林大学　王 心如

ある国の国民性は人の性格とよく似ています。人の性格は成長の中で形作られ発展していき、その特徴が日常生活のさまざまな面で現れます。それに似て、ある国の国民性は国の歴史が発展する歩

みの中で形作られ、その特徴は政治、経済、文化などのさまざまな場所に現れます。

日本を人に喩えるとしたら、おおかたとても個性的な人でしょう。日本の国民性に言及すると、ほとんど誰もが妥当そうな話を持ち出せますが、そこに出てくる言葉はある程度の重なりが見られます。たとえば細かくて敏感、強者を崇拝する、礼儀正しく慎み深いなどです。ここから、日本の国民性はいくつかの特徴が際立って印象深いということが分かります。

しかし、日本の国民性について私たちが持ついわゆる「印象」のうちどれぐらいが自己分析できるものでしょうか。『敗北を抱きしめて』を読む前に私が持っていた日本の印象は多くが記録映像から来たもので、雑文の散文、歴史の先生と日本語専門の先生に紹介されたものもいくつかあります。そうしたものにより、私は日本の国民性について初歩的で少し曖昧な認識を持っていました。『敗北を抱きしめて』は信頼できる大量の史料を集めた本で、それまで持っていた印象をはっきりと理性的でよりリアルなものに変えてくれました。

人生の途中の紆余曲折こそ人の性格の最も核心的なものを呼び起こしやすいもので、ある国の国民性は国が苦難、危機に直面すると際立って表面化するものだとずっと感じています。『敗北を抱きしめて』は日本の降伏、天皇の「玉音放送」から始まって、全面的に戦後の日本を見せています。精確な史料と生き生きとした叙述の中から、日本の国民性に対して以下のような認識ができました。

まず、日本の国民性は矛盾しており、しかも一組だけでなくたくさんの矛盾が融合しています。その一つが日本自身の条件とその強大な野心との間の矛盾です。日本の自然、地理の条件は、国の発展にとってよいと言えるものではありません。広い耕地がないため、農耕文明の発展が緩慢になるのは運命で、いくつかの基本的な自然資源が十分にないため、物質的豊かさなど問題外です。しかし、このような自然資源に恵まれない小国が、明治維新の後に発展して強大になりました。そこで、拡張し資源を略奪するという彼らの野心が徐々に現れてきます。その後、彼らはいわゆる「大東亜共栄圏」を考え出しました。拡張し資源を略奪しようと考えついたのは、自国では得られないからです。前述した恵まれない条件に話が戻ります。二つめは早すぎる経済発展と自国の蓄積不足との矛盾です。黒船来航により日本が鎖国を解いたことで、日本人はより広い世界を知ることになり、視察と参考により自国の発展に適した道のりを見つけ出しました。その後、維新の構想による指導の正確さと日本人の勤勉さ、知恵が加わって、日本経済は急激に発展します。しかし、十分な量的変化のない蓄積する質的な変化にはいくつかの不安定因子が潜んでいました。この本で描写されている日本の投降後のさまざまなふるまいから見ると、その社会の政治と文化の発展は明らかに経済発展の足並みについて行けていません。三つめは卑屈さと傲慢さの矛盾です。日本の国民性うち卑屈さという因子は本の多くの箇所に現れています。敗戦後、日本人は帰国した兵士と戦争孤児を排斥し、戦争犯罪のスケープゴートにさえしました。このような責任逃れの行為、自国の強さが足りないことにより派生した卑屈さと恐怖の情緒から出たものに違いありません。日本の国民性には傲慢さを帯びた要因もあります。たとえば、東京裁判の後でも、日本人は中国侵略したことを自発的に認めようとせず、戦争を起こしたのは本国の利益のためでありそれほど間違ってはいないと思い続けました。卑屈さと傲慢さは矛盾していますが、卑屈さから傲慢さ、傲慢さから卑屈さが生じ互いに転化することは多くあります。

次に、日本の国民性には「偏屈さ」の要素が含まれています。時には他人を壊滅させ自身も壊滅します。日本人は感情が細やかで敏感とさえ言えることもありますが、日本人は残酷で、時には人間性を消してしまうこともあり、日本人の執着は時に頑固で動かないものになってしまいます。日本の国民性には明らかに「偏屈」の感情が含まれるとずっと感じています。彼らは朝から晩まで一本の道に沿って歩んでいるのです。それで、彼らが経済発展を支える資源を探す方法を決める時、戦争を通じて資源を略奪するという方向転換に気づき、その後ひたすら代償を惜しまずその道を進みました。日本が投降を宣言したときの食品が極度に欠乏し文化が衰えた社会状況から見ると、日本は自身の「偏屈さ」のために重い代価を払っています。戦争を起こした時、彼らは他人を壊滅させていますが、ある程度は自身をも壊滅させているのです。

そして、日本の国民性にはある程度のストックホルム症候群が含まれています。アメリカ人は砲艦で日本人に開国を迫り、広島、長崎で原子爆弾を投下しました。しかし日本人のアメリカ人に対する第一

の感情は決して憎しみではなく受容で、「抱擁」でさえありました。米軍が日本を占領したとき、日本人は米国の民主化改革を受け入れ、マッカーサーを「抱きしめ」ました。日本の子供達は米兵のキャンディを喜んで受取り、米兵と日本女性のゲームを喜んで遊びました。まるで米国が占領者、支配者として目の前にいることを忘れたかのようでした。これは日本の国民性の特徴というだけでなく、どうやら人間性に共通する特徴なのではと私は思います。人が基本的に生存する需要さえ満足できない時、各種の精神は圧倒的多数の人にとってすべて空論です。だから、日本のこうした少し奇怪に見える心理も理解できます。当時の日本は物資が欠乏して、盗みが横行し、闇市が活発で、日本人の基本的な生存の権利は保障できない状況でした。米国は戦後の「虚脱」状態にある日本人にとって、底なしの困窮という暗いトンネルの中でのありがたい光、強大で日本人が従わなければならなず、また民主的改革の希望をもたらす一筋の光だったのです。

私は『敗北を抱きしめて』によって、日本の国民性をより深く考え、日本の性質に対する理解を進めることができました。この分厚い本を読み切って、日本に対する理解がより具体的に整ったものになっています。今の日本がどうして今のような姿になったのか、日本の国民性とは一体どういうものなのかといった、それまで心にまとわりついていた疑問に一部の答えが見つかりました。（原文中国語）

『中日文化交流史話』を読んでの感想

華中師範大学　呉　中鵬

経済は確かに貴いですが、文化の価値はさらに上です。物質的文明はにぎやかな都市をもたらし、文化は精神的な財産を作り出します。中日両国は紀元前 3 世紀に徐福が日本へ渡ってからこの 21 世紀に至るまで経済、文化、社会……交流、長い歳月を歩んできました。歴史の長い流れの中で、中日両国は上古の遺民から漢や唐の使節まで、鑑真、弘法大師から円仁、宋西禅師まで、画聖・雪舟から柔道の始祖まで、羅森と『日本日記』から罔千仞と『観光紀游』まで、魯迅と藤野先生から李大釗と吉野作造まで……2 千年あまり中日の海上交流の航路はずっと続きました。

1840 年のアヘン戦争の前までの 2000 年近い時間の中で、日本は国政から経済文化までほとんどすべて中国に学んでおり、中日交流について言うと中国から日本へのアウトプットでした。西洋列強の軍艦や大砲を見て、日本は当初、中国と同じように鎖国政策をとりました。その後、日本は明治維新を経て西洋化し、国が次第に富み強くなりました。1894 年に中日戦争を経験した後、中国国民が次第に目を覚まし、それから日本に学び始めました。中日交流について言うとこのときの中国はインプット側で、戊戌変法便がその中の代表です。21 世紀に入ると中日は互いに学習し交流することが増え、インプットとアウトプットは同時に行われています。

『中日文化交流史話』は北京大学歴史学部の王暁秋教授が編纂し、『中国文化史知識叢書』シリーズとして商務印書館から出版されている本です。

しばらく中日の政治、領土などの面の恩讐をさておいて、中日の文化交流の歴史を振りかえると、文化文明などのソフトパワーの学習交流の中で、中国には中国の光り輝く美しさがあり、日本には日本の取るべき所があることがはっきりと感じられます。今や文化の面で探求がどれほど成熟しているか、どちらがより多く出費しているかには、すでに現実的な意味がありません。文化の発揚と継承に対しては、私はこれこそ私たち一人ひとりの青少年、中国人が考え、学ぶべきことだと思います。

春秋戦国の百家争鳴、唐詩や宋詞の最高峰に達した芸術性、唐宋の経済制度、元代の軍事、明代の科学技術と清代の服飾や建物……中国は世界の文化史にいくつものきらきら光る明珠を残しています。日本は遠さをいとわず学習交流に訪れています。月は満ちれば掛け、高いところでは寒さに耐えられないもので、清末には保守的で進取の精神がなく、おごり高ぶり自己満足していたため文明の足どりが滞りましたが、日本を別の角度から見ると明治維新で徹底的な革命を行い、中国化から西洋化に移行して、順調ではないながら曲折を経てなお前進しました。

中国の近代史、近代文化の発展は読むたびに悔やまれます。1841 年に林則徐が流刑に遭い、自ら翻訳を主導した『世界地理大全』の手稿『四州志』を魏源に託します。魏源は 6 年を経て、100 巻の『海国図志』を編纂しました。100 巻あるこの全書は約 88 万字です。その内容に五大陸の数十か国の歴史と地理のほか、アヘン戦争の経験と教訓を総括して海上防衛の戦略戦術を論じた『籌海編』4 巻もあります。これは初めて近代の中国人が自ら編纂した世界史世界地理に関する重要な著作で、当時では内容が最も豊富な世界に関する知識と海上防衛の百科全書です。しかし魏源の『海国図志』は国内で相応に重視されることはなく、日本で幕府の執政者から高度に重視されました。『海国図志』は日本の幕末のインテリに影響を与え、特に尊王攘夷派の維新の志士に啓発を与え、それによって日本の明治維新は推進されました。たとえば幕末の著名な維新思想家、佐久間象山や吉田松陰らです。

中国の近代文化は発展しなかったわけではなく、愛国、革新、国の統治に精励する大任を担うべき人物が不足していたのでもなく、政権側による支援や利用がなく、一般大衆の意識を喚起することもなかったのです。簡単に言うと、近代中国はまだ「目覚め」ておらず、「本当に目が覚めた」人が少ししかいませんでした。そのため高く評価されるべきですが、とりわけ物寂しく悲壮に見えるのです。

このことは中国の重々しい歴史の文化と関係するのかもしれません。中国人は古代の輝かしい文化を背負いすぎ、無形の山のように年々累積して泰山ほどの重荷になっていました。そして多くの絢爛な文化の中で分からなくなってしまい、高潔の士を自任し、象牙の塔の中で自己陶酔に陥ったのです。内憂外患の残酷な現実、日清戦争での日本の勝利、贅沢三昧でみだらな堕落により、多くの中国人がアヘンの中から一時的な慰めと独りよがりな精神の庭を得ることを選びました。絢爛な文化の林を飾る楼閣は仰ぎ見ても継承せず発揚しないことを中国人が選択したのです。中華文明 5 千年で蓄積されたものは重々しく、選択が多すぎたために国民は選択しないことにしました。西洋の乱暴な外国の飛躍、隣り合う小国の飛躍により中国人が学ぶべきもの、すべきことが多すぎて、なさなくなったのです。

文化を掲げる高い棚を選ばず、なさなかったことが、近代中国の悲劇です。

同じ時期に日本がある程度「目覚め」たのも、それらしき何かにすぎませんでした。歴史の流れを見渡すと、日本の「目覚め」は全面的ではなく、欠けているのです。明治維新は日本が世界に目を開くきっかけとなり、それから日本はとても発展しました。中国は日本に対するアウトプットからインプットに向かい、清末にはブームになりました。典型的なのは中国の日本留学の学生です。このことは 20 世紀の中国の大地に発生する重大な一里塚となる事件の伏線を張ることになりました。

日本が明治維新を経てから完全に中国化から西洋化へと転化したと言う人がいますが、私は軽々しく同意しません。日本はまだ天皇を残しており、天皇制は日本の不完全な文化の残す一部分、とても重要な一部分です。

近代の中日両国での文化の発展はいずれも込み入っています。中国は原則の堅持だけを選び、日本は中国と西洋の折衷を選びました。このことはここ数年来の中日の文化交流の摩擦を根本的に釈明してもいます。中国はずっと自国の最も基本的な道徳の文化と基本原則をしっかりと守っていて、古代ほどの繁栄はないものの、探求の中で前進しています。日本は中国の近代のそのような苦難を経験できなかったため、方向性を変えました。学ぶのも速く、脱ぐのも速いです。

中国古代の文化が盛んな時代から、文化に慢心するまで、そして不屈の精神の伝承と今日の振興まで、文化の道は果てしなく遠い道です。日本文化の中にある謙虚さと仕事熱心さが日本民族の最大の財産です。また誰もが学ぶところでもあります。

今後の中日の文化の発展は、両国民の歴史や文化に対しての重視と継承の度合いにかかっています。中日の文化交流の発展する基礎は友好と平和です。李大釗と吉野作造、魯迅と藤野先生のように。（原文中国語）

ほこりの中の日本の美──『枕草子』評

大連医科大学　裴 天序

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。」ほこりが舞い上がっては落ちて、枕辺の本は多くの人に笑われます。まさにそうした意趣を持たせて清少納言が千年前に書いた『枕草子』は時の流れを経て次々と人手に渡り、私たちの目の前にやって来ました。もたらされたのは『源氏物語』と「平安時代の文学の双璧」と並び称される名作だけでなく、日本文学には珍しい清新な夜風もです。

日本人は見事な民族です。芸妓の一挙一動の中から謹直な優雅さを見ることができ、俳句の行間からは静かで婉曲な悲しみを味わえます。こういった影響のもとで日本人は「もののあはれ」や「わびさび」を尊ぶようになりました。口に出せない孤独、最後のお茶を飲んだ時の庭の 1 枚の落葉です。しかし清少納言という「幾多の挫折や失敗を繰り返した」女性はその道に反して、女性特有の細やかな情操で生活の中の細々した、それでいて気を止める価値があるものを発掘しています。『枕草子』の「類聚」の部分で書かれているのはまったく普通のささやかなことばかりです。精進の後の修行、枯れて黄ばんだ葵の葉、春の明け方の空の色、子供が駆け回ると翻るリボンなどが、彼女の手にかかると「怠惰になりやすいこと」、「孤独に感じられること」、あるいは「かわいいこと」と呼ばれるようになります。日本文学は繊細さで有名ですが、『枕草子』を読んだ後では、そもそもの「繊細さ」もいくらか粗くなってきます。清少納言が書く宮廷生活は、一見する映画で見られることと違いがなく、すべて明るく美しい色、かすかな香気を帯びています。しかしよくよく味わってみると気づくのは、他者の作品は風が吹いた後の池だとすると彼女の作品は水面に落ちた桜の花びら、不作為で、それでいて心の最も柔らかいところに落ちるものなのです。

『枕草子』全書を見渡すと、宮廷生活に対する描写があり、生活に対する悟りがあります。女性として、彼女は一生の中で最も楽しい時間をほとんどすべて宮廷の中で過ごしています。悲しみもずっと存在していますが、清少納言は悲しみを生活の中のスパイスに変えているのです。『源氏物語』が宮廷の暗い生活を表した重々しい作品だとすると、『枕草子』は最も明るい筆致で一人の女子が経験できる最もすばらしい年月を描いたものに違いありません。紫式部は落ち着いた名門の令嬢ですが、その落ち着きが文に出ると、思わず重く感じられてしまいます。いっぽう清少納言は活発な庶民の娘でありながら彼女の風情は優雅で、くどくど言っても人に好かれます。彼女のしゃれっ気と小ざかしさがすべて文字の中に溶け込んで、『枕草子』という散文のすばらしい魂になっています。

川端康成が「日本の美」を話題にするとき、えてして『枕草子』を避けて通れません。平安時代が人に与える感覚は本来、次々と重なる幻影を帯びています。十二単の下に流れ出る黒髪にも、簾の向こうに黙って立つ影にも、人を引きつけて放さない神秘さがあって、近づきがたい品があります。しかし清少納言は簾を上げて漂う煙霧を押しのけ、活発な女官、淡白な景色を私たちに見せてくれました。そのすべてが、白黒の図画に突然色がつき、無声映画で急に歓声が沸き始めたようなものです。上品さを必要しないこうした小さな風情が、かえって平安時代の全貌を支え、川端康成の心にある「日本の美」を支えているのです。

日本人は他の民族に比べて、「個人」の探求に事欠きません。彼らは過去の歌謡を歌い、見えない昔を書いて、存在しないものを残そうと努めています。清少納言の千年前の「枕辺の本」は後の時代の人間からしても昔の夢が保存しにくいだけのものです。しかし時代がどれほど変遷しても、千年前の「香炉峰の雪は簾をかかげてこれを看る」に注釈を付けた女性、ほこり一つ一つを気にとめていた女性、そして枕辺の本のような普通とは異なる優雅で平然とした『枕草子』の解釈は私たちが覚えていられます。（原文中国語）

日本の「いじめ」

上海交通大学　王 若平

日本語を結構長い間勉強してきたので、日本の生活にある程度の憧れを抱えているが、日本でも、様々な社会問題が起こっていて、文学にも影響を及ぼしている。

よく社会問題、家庭問題などをテーマにする作家として、重松清氏の名が知られている。私は特に『ビタミン F』と『青い鳥』の二つの作品が好きだった。いずれも、感動のあまりに、食事さえ忘れて読み続け、気がついたら、もう涙がにじんでいたほどだった。

二つの作品には時代こそ多少違いがあるが、いくつかの共通点がある。その一つは、「いじめ」問題に関する部分があることである。

私たちみんなは、他の人を愛し、優しく接しなければならない。人を嫌がったり、憎んだりしてはいけない。なのに、どうして、「いじめ」事件が今もなお相次いでいるのだろうか。文部科学省の調査によると、「いじめ」が認識された学校は40%という結構高いレベルを保っている。

十五、十六歳というのは、人生の中でも凄く輝かしい時期なのに、どうしてこんなことになるのだろう。

今すぐ空高く飛び立とうとしているのに、どうして、冷たい雨ばかりに打たれているのだろう。

一生に一回だけの「青春」を味わうべきなのに、たくさん友達が作れるはずなのに、誰とも仲良く付き合えるはずなのに、どうしてこんなことになるのだろう。

まず、何と言っても、家庭の責任は無視できないであろう。親としては、子供の成長の第一責任者であり、常に子供を守らなければならない。しかし、その役割は十分はたされているのでしょうか。

日本のバブル経済が崩壊し、30年にわたる不況に陥っている。経済はほぼ成長がない時代である。長く続いてきた終身雇用制も崩壊し、長い間会社に身を尽くしてきた中年層のサラリーマンたちには、「明日にも解雇される」という危機が迫って、常に全力をつくさなければならない。さらに、日本人生まれ付きの集団意識が加わり、決まった仕事時間の後も残業しなければならない（手当なしの「ボランティア残業」もよくある）、或いは、人間関係をスムーズにするために、上司と同僚に付き合って、何軒も回ってしまうことも少なくない。基本的には家に帰ったらもう夜の中である。

子供の方も幼い頃から受験戦争で、まだ世界観もちゃんと付いていない子供たちが、名門校に入るために塾に通ったりする。偏差値教育から生ずるストレスを余儀なく背負わされている。だから、メンタル上に問題が起こってもおかしくないであろう。

こうして、日本の家庭では、「父は残業、母は家事、子供は受験」という仕組みが定着している。母親はともかく、父親と子供のスキンシップが十分だとは言い難い。特に近年、家族全員食卓の前に揃って食事をするケースが少なくなり、若者の孤食問題が注目されている。

したがって、『ビタミン F』の中では、学校でいじめられても、両親には話さず、「転校してきた『セッちゃん』という友達がいじめられている」という嘘をついたりして誤魔化そうとする女子生徒が描かれている。

ビタミンこそ十数種類発見されたが、正式に「ビタミン F」という名前が付けられたものはない。『ビタミン F』というテーマには、「Family（家族）」や「Father（父親）」は人にとって欠かせないものである、という意味が含まれている。家族は間違いなく、子供の一番そばにいる人である。

しかし、誰よりも、そばにいたはずなのに、どうして、君の声が聞こえなかったのだろう。

一方、学校と先生の責任も十分問われるべきであろう。教師の資格に関しては、日本では、教員免許制度など、かなり厳しい制度が設けられている。しかし、どうして、学生たちをちゃんと守れなかったのだろう。前述の『青い鳥』の中では、「友情の契約」、「青い鳥レターボックス」など無駄な制度ばかり作たりして、ちっとも子供たちの心の扉を開けなかった教師が沢山出ている。実際の事件を見ると、先生の責任が問われるケースも少なくない。

日本人はよく「以心伝心」という言葉を使う。それは、コミュニケーションの最高の境地だと言っても構わないであろう。誰だって嫌いな人がいるはずである。誰とでも仲良く付き合うことのできる人はそもそも存在するわけがないのである。だから、『青い鳥』の主人公である村松先生が、吃音症で言葉さえ普通に話せず、どう見ても生徒たちの「いじめ」の対象になりそうなのに、一生懸命「心」を、「大切なこと」

を伝えているので、心理上に問題が起こった子供を救えたのであろう。「言ったとおり、喧嘩したっていい。それはいじめにはならない。相手の痛みも知らなく、相手の涙も知らないこそ、「いじめ」である。つまり、相手の心の声を聞くこと、心と心をつなげることこそ、大事である。

青春の明かりが冷たい雨の中で消えぬよう、心から祈っておる。

明日また、会いたい。また、話したい。あの時聞こえなっかた声を、もう一度、聞きたい。（原文日本語）